

82-571



1200501325883





280-71

82-571

82
571

巴里の美術學生

外美術談

芋洗生記
湯淺一郎挿畫



巴里の女子美術學生

畫報社發行

神田連雀町十八番地

明治卅五年十二月



著者此小冊子
友人
芳陵吉岡育君
に捧ぐ

“What I must do is all that concerns me, not what the people think. This rule equally arduous in actual and intellectual life, may serve for the whole distinction between greatness and meanness.”

Emerson.

“Qu’il soit donc permis à chacun et à tout de voir avec les yeux qu’ils ont..... Dans tous les arts, la victoire sera toujours à quelques privilégiés qui se laisseront aller eux-mêmes, et les discussions d’école passeront comme passent les modes.”

George Sand.



前置詞

「巴里の美術學生」は記者が千九百年巴里大博覽會見物を終へ、歸國早々、二度目の巴里の夢の未だ醒ぬ中に認め、昨年春頃の二六新報紙上に連載したもので、閑の無い爲に續けられず、俄然中途で切れて居る。『藝界警語』は昨年の秋頃記して、これも同じく二六新報に連載したものの最後の「批評家と技師家」の一篇は數年前美術評論に投書したも

のである。孰れも皆、忙はしき貧乏教師が教場
出入の餘暇に認められたものであるから、首尾一
向に纏つた處がない。併し纏らぬと知りつゝ、
書肆の云ふが儘に再版すると云ふは、世間、美
術に就ての談論は澤山あるが、茲に集ると同
様の事に就て云つた者を未だ知らぬ處から、
幾分か美術愛好者の慰にもなり、又た一御免
を蒙つて一多少益する處もあらふかとの考
へからである。或は記者の考が誤て居るかも

知れぬ。

挿畫はエドワード、グ、エルの原畫を、友人の
湯淺一郎君が此冊子の爲に縮寫されたので、
御覽の通り記事に非常な興味を添へて居る。
出版時期の迫つた爲に無暗に急いだにも拘
はらず、快く引受けられた氏の好意と、又た種
々の事に就て助力を與へられた美術新報主
筆小原大衛君の好意とを改めて爰に感謝す
る。



室居の生學術美里巴

明治三十五年十二月

麻布芋洗坂下の寓居にて

記者識

巴里の美術學生



Ed elle p me. Nessun maggior dolore,
Che ricordarsi del tempo felice
Nella miseria; e ora sa 'l tuo Dottore.
Ma se a conoscer la prima radice
Del nostro amor tu hai cotanto affetto,
Farò come colui che piange e dice,
Canto V, Inferno.



巴里の美術學生

芋洗生記

大都の社會生活と云ふものは何處も大概は同様であつて、ロンドンもニューヨークも巴里も羅馬も大した相違はない、何れの都にも贅澤と無駄に日を消して居る貴族や金持がある、コツ／＼と朝から晩まで勉強して居る學者がある、有難い一方で日を暮して居る宗旨家がある、デコ／＼と着飾つて大道狭しと練り廻る淫賣婦がある、又た日に夜を續て働き抜く貧乏人がある、此都にあつてあの都にないこと云ふものは先づ無いと云つて宜敷からう。

所が茲に巴里にのみ在つて殆んど他の都に見ることの出来ぬものが一つある。これが美術家の生活である。成程ニューヨークにもボストンにも立派な美術學校がある。ロンドン、ローマ、ミューニツク、アントウエルプにも夫々有名な美術學校があり、又た立派に生活を立て居る一本立の美術家が大勢あり、學生の群があるが、併しそれは學生が技術を研究し大家が家業大切に商賣をして居ると云ふ迄であつて、一種毛色の變つた、特種の美術社會を形造つて、他の社會と異つた、一種固有の美術家の生活をやつて居るのは巴里の外には無い。この美術生活と云ふ奴は多數の美術學生、殊に多數の外國から來て居る留學生の集つて居る處でなければ出來ない。所が世界の美術教

育の中心は時によつて處を變へるから、今でこそ巴里に本陣を構へて居るが一時は羅馬にも、ミューニツクにも亦たツセルドルフなどにも華々しい美術生活が行はれて居たのである。

併し巴里は昔から美術生活の行はれて居つた所で、今日迄多少の盛衰はあつたが全く廢れて仕舞つたと云ふ事はない、引續いて今日迄傳つて、巴里名物の一として數へられて居る。ベンヴェヌト、チエリニの傳を見ると、其時分に伊太利亞から出稼に來て居つた美術家連と土地の技術家が如何に生活をして居つたと云ふ事が判る、確かに其時代に既に技藝家と云ふ一種の團體が他の商賣人と異つた生活をして居つた。夫から「巴里に於ける一英人」と云ふ書物があるが、

此本などを見ると十八世紀々末から十九世紀の半頃へかけて、巴里の美術家連がどの様な生涯を送つて居たかよく解る。近頃になつては此美術家の生活と云ふ奴は一種の名物又た随つて一種の研究物となつて居る。七八年前に西洋の讀書社會を騒がしたデュモリーリエーの書いたツリルビー又た其の以前に出たスチーヴンソンのレツカーなぞは孰れも此巴里の美術社會の生活を寫して、興味を添へた。

さて美術の生活とは一體何んであるかを問へば、返答は別にむづかしく無い。即ち美術家が、他の人間社會と別に團體を結んで、他人の事には一切無頓着に、朝から晩まで美術の事計り見、聞、話して一生涯を暮らせるると云ふ斯様な社會に生活して居る其有様を云ふので

ある。所で之はロンドンでもニューヨークでも何處でも出來さうな物であるが、實際の所出來ぬ。巴里に五六年も勉強して居つた米國の美術家が本國へ歸つて來ると「米國は駄目だ、美術の空氣がない、金錢の空氣計りで美術の空氣がない、アーバ里アー佛蘭西」と云ふ聲を出すのが千人が殆んど千人であると云ふのは、米國には美術家の團體生活が無いと云ふ事を證據立つて居るのであつて、つまり巴里のみが一種技藝家にとつて心持の善い空氣即ち美術生活を持つて居ると云ふ事になる。

之は無理ならぬと云ふ事は、第一巴里には別に美術社會と云ふ特殊の團體を形造る丈の人間の數がある。政府の美術學校丈でも學生が

一千二百人もある。これ丈を見て巴里美術界の有様が想像されるであらう。此外に各私立學校の學生、女學生、既に修業の時代を終へて居る一本立の技術家、音樂は別にしたとしても建築、諸工業、手藝に關係のある所謂、小美術をやつて居る職工の連中から外國より移住をして居る美術家を加へたならば、巴里の技藝社會は少く見ても萬に近い數になるであらう。

六

此大勢の人間が巴里と云ふ比較的狭い一箇處に集つて居るのであるから自然と其集合が一種固有の生活をやるのは當然である。巴里では實に技術家が一生専門の美術と首ツ曳をして美術に關係ある事計りを見聞きし、他の事には一切心を奪はれずに心持善く生涯を終へることが出来る。

所が亞米利加や日本などでは左様は行かん。縦ひ別に美術生活をやる丈の人數が揃つて居るとしても人間が丸で駄目だ。美術生活をやるには數も必要であるが、人間の根性が矢張一種藝術家の根性とならなければ行かん。巴里には數百年の間一種の社會を形造つて居つて、夫が爲めに出来て居る技術家の根性がある、習慣がある。これが肝要な點であつて此氣風は中々一朝一夕に製造は出来ない。

七

一體西洋人と云ふ人間は大概は心置の無い氣さくな一口に云つて仕舞へば子供が其儘大人になつた様な奴が多い、所が西洋の技藝家と云ふ奴は此普通の人間に倍して淡泊な無邪氣なのが常例である。云

ふ事も、する事も日本人の眼から見ては話にならぬ程子供っぽい人間が多い、若し日本人で西洋殊に巴里に居る藝術家の様な無邪氣な真似をしたら馬鹿とか氣狂ひと外思はれはすまい、相應にやつて居ても、親類中の厄介物、不評判になるのが今の通例である。

學生として、或は商人として西洋に永く住んだことのある人から見ると日本の人は如何にも交際のしにくい、油斷のならぬ、不活潑な、底の知れぬ、興味のない人間に見えるだらうが、技藝家として住んで常に西洋の藝術家と交つて居つた人から見たら日本の藝術家と云ふ連中はどう見えるだらうか。西洋人の云ふ交際と云ふ様なものが日本に行はれて居るであらうか。他人の相手になる事の嫌ひな、大

勢の前に出る事の厭ひな、人に口を開く事を憚り、人の話を聞く事を好かん、自分の感情を人に打開けて語る事をせぬ、他人の前に威張りたがり、己の實力を成るべく大袈裟に見せたがる、と云ふ、斯様な人間が、交際など云ふものが出来るか知らむ。

人間が互ひ／＼に一時も永く他人の顔を見て居たい、一言も多く他人の詞を聞きたい、己の考も成丈多く知らせたい、人の考も十分聞きたい、喰うにも共に飲むにも同時と云ふ考で、一人よりは二人、二人よりも三人と云ふ風に共同の樂を感じてこそ團體の生活と云ふものが出来る。人を見れば、何か役人の様に威張りたがる。威張り度いから、人の云ふ事は聞きたくない、何事も自分一人と云ふ考では、

凡て共同と云ふ精神から湧て来る快樂は味へない。西洋風の俱樂部とか或は佛蘭西のカツフェの様なものには眞似たくも出来ない、矢張一體の根性が待合の四疊半に合ふ様が出来て居る。

之は少し話の外に出た様だが、僕の云はうと云ふのは先づ斯様な根性では一の團體生活と云ふものは出来ない、随つて巴里の美術生活と云ふ様なものは、今の日本の様な社會には湧て来ない、羨ましく思つても駄目だ、之に必要な要素が無い、と云ふ事を話すと、同時に巴里の技藝社會はこれと丸で違つた人間の集會所であると云ふ事である。

さて、一體が斯様な風であるから、廣い、不便な東京に五百や六百の技術家が居つた所で、別に特種の美術生活と云ふものは無い。美術家はあつても別段他の人種と異つた所がない、異つて居ない所ではない、少しは腕もあり評判もある人間で自分の商賣さへ碌々せず、にトンダ政治家の眞似をしてヤレ運動であるのヤレ會合であるのと技術家が政治屋の眞似をして喜んで居る奴さへある。こんな連中に藝術家の生活なぞ一風變つたものが出来様筈が無い。

それから又た美術學校もある、併し其學校と云つても別に他の學校と異つた所は無い。他の高等學校や中學校と別に異つた所はない、同じ様な規則で縛つて、同じ様な教授法でやつて居るのである。學生と云つても無論の事で法學生や醫學生と別段これと云ふ違つた

所は見えない、之が美術學生で御坐いと云ふ特色がない。同じ様な事を考へて、同じ様な根性で居るのである。

巴里では左様でない、美術家は他人に優れて根性が淡泊だ、他の商賣人に勝れて活潑だ、實に勇壯だ。何となくカラットした氣風がある。獨立の精神が強い。他人でも外國人でも感服する技藝の前には他人も己も皆無だ。威張らないし、又た威張らせない。

一體の根性が左様である上に周圍が甘く行つて居る。第一技藝家の活動する範圍が廣い上に多數の専門家が同處に集合して居るのであるから、朝から晩迄、年が年中、美術の事を云ひ、聞きして他事には一切無頓着に生涯を過す事が出来る。常に二三の展覽會がある。

政府の美術館、圖書館がある。大家の仕事場を訪問する。美術家の俱樂部に集る。カフェーに美術家の友人と語る。外國の技藝家に逢つて見聞を擴げる。新聞雑誌を讀んで技藝上の見識を養ふ。と云ふ様な具合に常に外部から刺撃を受けて、技術も進め、又た其道の慾を増して行く事が出来る。之が所謂美術の空氣であつて、米國人なぞが巴里にあつて米國に無いと云ふものは此境遇の事である。

此一種の社會を爲し、特種の生活を遣つて居る美術生活の最も肝要な、又た大部分を占めて居るのが美術學生である。此團體の生活は既に一家を爲して居る美術家の生活とは餘程異つて居る。之が僕の
本題である。

美術學生の事を話す第一に云ひ度いのは、西洋の美術學生と云ふ奴は體格屈強なゴチ／＼した人間で、面の生白い、瘦形の病人でない
と云ふ事だ。夫から奴等は自ら人間の屑を以て任じて居る不活潑な
イクヂの無い、根氣のない、青年でない、實に活潑な、自任の強い、
獨立の根性のある、飽迄も根氣強い、子ツチリした剛情な奴等で、
人に對しては遠慮會釋も無い、代りには親切氣のある、能く喰い、
能く飲み、能く喋り、又た能く悪口を云ふ奴である。

特別に云ひ度いのは學生の活氣のある事だ。之は殆んど亂暴と云つても善い位である。併し其亂暴も皆無邪氣な亂暴であつて、一寸猪や熊の暴れる様なもので其中に少しも惡氣はないし人間らしい意地

の悪い所は無い。が兎に角騒ぐ、活潑だ、四十歳前後を頭として二十二三歳の小僧連迄あるが三十前後の奴等も丸で五つか六つのワンパク者の様に騒ぐ。勉強することも勉強するが暴れる事も實に能く暴れる。

僕が初めて巴里に行つたのは二十四年の夏であつたが、美術修業と云ふ目的で行つたのであるから兼て評判に聞いて居つたアカデミー、ジュリアンと云ふ私立美術學校に入學した。巴里の美術教育界の大體を話すと、先づ第一に政府の建て居る美術學校がある、即ち有名なエコール、ナシヨナル、エ、スペシアル、デ、ボーザールで、一寸前に云つた通り一千餘の生徒がある。學校は例の書生窟カルチエー、



巴里美術學生の標本

ラツタンの端の方でセイヌ川に沿ふた處にある。
此外には種々の私立學校があるが、其中に最も有名なのが、アカデ
ミー、ジュリアン、それからコロラシーと云ふのがある、白馬會の
和田英作は此コロラシーに入學して今勉強して居る。此外にジュラ
ンと云ふ學校もある。
先づ此の三校が有名な學校で、今は大家として指を折らるゝ人物も
元は大抵此等の學校の生徒であつたのである。
併し是等の私立美術學校は、學校とは云ふものゝ寧ろ修技場とか今
一層適切に云へば道場とでも云つた方が當つて居るのであつて、決
して素人の考へる様な美術學校―學校然とした教育場ではない、唯

技術を練習すると云ふ丈の場所であつて、技巧を鍛へ上る外には學術の講義の様なものは一切無い。是は無くても差支へないので、政府の美術學校は萬事開放主義でやつて居るから遠近法とか、美學とか、歴史とか又た解剖の講義などは私立學校の生徒でもボーザールの生徒同様傍聽する事が出来る、態々各校に置いておく必要はない。

元來が斯様な組織であるから自然と校舎なども學校然とした構へはない。唯光線の善い部屋で五六十人の生徒が入る事の出来る所であれば差支へない。萬事實利主義で遣つて居るから、他國の美術的の美術學校から行くと其質素と、殺風景なのに驚く。

マア大抵學校は二階か三階にある、平家で一軒別に構へて居る所でも裏の様な處に引込んだ實にムサクロしい場所が多い。外部もつまらないが内部は實に殺風景極まる。壁は荒壁、天井は梁が現はれて居る、床は荒板で菰一つ敷ては無い、部屋中裝飾と云つては競技優等の畫を安つポイ額椽に入れたのが壁に懸つて居る計りである。之と、時に依ると生徒が教師の肖像をポンチ繪風に描いたのが壁の一部にある。此位の物で後はドロンとした灰色の壁計りで、美術學校なぞ想像して行くものには淡泊、無味極まる粗末な所だ、普通の大工の仕事場でも今少つと興味がある。

僕の行つた時にはジュリアンの學校がリユー、ジユ、フオブルグ、

サン、ドニと云ふ町にあつた。之はポルト、サン、ドニを這入つてまつ直に五六丁行つた右側の處で番地は確か四十八番と思つた、入口を過ぎるとガラ明の中庭があつて、其處から左にある櫓子段を上ると狭い廊下がある、何でも一階は何かの間屋であつたと思ふ、時々錢勘定の音を聽た事がある、學校は其二階にあつた。此時には學校が三軒に別れて居つた、一がプラス、ヴァンドームの近邊でリユー、サントノレ、それからリユー、フォンタンヌと、次に我々のと外に女學生の爲めに設けてあつたのが巴里中に三箇所、都合五箇所でやつて居つた。詰りアカデミー、ジュリアンと云ふのが五箇所に支店を出して生徒を教育して居つたのである。

僕の入學した時分は繪ではジュール、ルフェーブルとバンジャマン、コンスタン。ブグロー。ロベール、フレアリー。フラマン。フェリエとゾーセーの連中、それから彫刻の方ではシャピユーが受持つて居つた。之は此大勢の教師が大勢寄つてたかつて一人の生徒を攻付けること云ふ譯ぢやない、教師の受持の教場があつて其教場に来る奴才を自分が教へる、生徒は入學の時に自分の好きな人を定めて、其教師の室に入ると云ふ次第である。

丁度此時には學校に部屋が三つ外か無い。ブグローとフェリエの受持の教場が一つと、バンジャマン、コンスタンの受持の教場と其間に彫刻生の研究場が一箇所と合せて三間、外には小さな事務室と

小使部屋位のもので、話に聞いては居つたが、世界に有名なジュリアンの學校もコンナ處かと大に驚いた。

家も粗末であるが入校の手續も實に無造作だ。別に入學試験と云ふものは無い。下手は下手、上手は上手なりに其儘入校が出来る。技倆にも構はないが年齢にも構はない、教場に入つて驚いたのは十六七の小供と五十位の白髪交りのお爺さんと平氣に列んで描て居る。段段慣れて見たら、此お爺さん決して珍らしくない四十歳位の人は幾人も居つた、而も皆々立派な腕のある奴だ。これで大抵學校の程度が分るだらう。家こそ穢いが其中でやる物から云ふと實に恐ろしい學校だ。之で思ひ出すが、巴里に居つた時黒田、岡田の連中と一緒

にカツフェーに行つて居つた、丁度其時に乞食が、ヴァイオリンを奏でよやつて來た。「可愛ソーに若し奴が日本人であつたなら音楽學校教授で從六位とか高等官とか云つて威張れるのに、生れ處が間違つた」と連中の一人が云つて笑つた事がある。併し之は笑處では無い、音楽の道計りでなく大概は其通りで繪畫彫刻の所謂大家連も本場へ出して目方にかけてたら矢張砂文字か燒判師位の程度に落第する的多いだらう、幸ひにして世界の隅に引込んでヘツポコなりに比べて喜んで居るから相應にエラさうな事を云つて居れる。日本が樂園と云はれて居るのは豈唯風景季候に於てのみならんやだ。

さて、生徒は事務所に就て入學の手續をする。手續と云つて別段むづかしい事は無い。唯だ誰に就て學び度いと教師を極める。之と同時に一ヶ月なり三ヶ月なり又一年なりの月謝を前金で拂ふ。此外には入校願も、在學證書も、保證人も、證明もなにも要らない。前金は拂と云ふ奴が凡て是等の代りをする。此法はジュリアン計りで無い、米國あたりの學校でも其通りである。ソコで其時分の月謝が、終日の稽古であるとか一ヶ月分五十法、^{フラン}半日だと二十五法、終日で一年の謝金が三百法、彫刻の方が四百法である。

學校入學の手續は斯様で實に簡單であるが、實際畫室に行つて生徒の仲間入りをすると云ふ奴はさう輕便には行かぬ。と云ふのは教場

の整理は一切自治制であつて教場の事は一切生徒が自分でやつて居る。所で、學校に入るのと教場に這入つて生徒の仲間になると云ふ事は自ら別の様な具合になつて居るので、入校は屁でもないが入學は屁でもある。コイツ下手を遣ると到底學校に居溜いぢまれなくなる程苦められる。

先づ第一、新入生が初て教場にやつて來ると教場の連中が種々の事を云ひ立てゝからかふ。これは誰でも遣られる。老人であらうが、女であらうが、外國人であらうが、又た自國人であらうが、一切誰と云ふ事に構はずにやる。大抵新入生がポルトフオリオを手にして戸を開けて顔を出すと、畫室の連中が五六十人一同此方の方を向いて



新入生の學

アーと云ふ様な聲を出す。コイツ不意に来るから全く知らずに居るとメンを喰ふ。

サアそれから悪口が初まる、一悪口と云つても一通りや二通りの悪口ではない、餘り旨く穿つて居る批評で、云はれて居る御當人迄が可笑なることがある。時によると身振でサンザからかはれる、例へば新入生が丈の高い男で首でも長い奴なれば、生徒の一人が即坐に畫帖を携へて、麒麟の真似をして皆の前を歩き廻る、甘く新入生の癖を採つた上に、妙な眼をされて、ヲマケに多年動物園で研究した鳴聲でも遣られたら、到底真面目に椅子に坐つてはをられない、生徒もドツと吹出す、モデルも笑ひ出す、暫時は稽古をせずニワツワ

と云つて騒ぐ。

英國人であるとか、獨逸人でゝもあると一層烈しい。英吉利人の下手な佛語の眞似をする。妙な聲で英吉利語を唸る。ロースト、ビーフ。ブルム、ブツヂングなど云ふ辭が處々の隅から出る。端に居てヒヤ／＼する様な毒言も、可笑くて到底眞面目になつて描て居れぬ奇言も遠慮會釋なしに出る、實に其頓智と其滑稽にはジュリアンの生徒に敵ふ奴はない。ジュリアンは悪口、頓智滑稽の名所だ。

此悪口雜言も齒をくいしめて開かぬ振り、先づ無事に自分の坐を定めると、其次に學生中の幹事と云ふ様な奴がやつて來て仲間入の金をとりに來る。之が學生仲間の束脩の様なもので、定額は一人前確

か五法フラスであつたかと思ふ。此の金を拂ふと云ふと幹事の觸出しで出席者一同近邊の酒屋に酒を飲みに行く。之は無論修業時間中の事で、別に規則と云ふものも無い。一同賛成と云ふ事なれば修業時間でも勝手に稽古を止して仕舞ふ。

酒屋へ出かける時も中々面白い。一同二列位に行列を組んで人道を歩く。途中は歌を謠ふ、演説をする、樂隊の眞似もすれば、物賣の假色をやる。衣物は無論、稽古着其儘で、例の長い職人の上ツパリを被て居る。帽子を被る奴もあるし被らぬ奴もある。通行人の背中を後から叩いて知らぬ振をする奴もある。通りかゝる女に戯れる奴がある、中には自分の背中に「賣物」など云ふ看板をブラ下げて平

氣で歩いて居る奴もある。活潑と云はうか無頓着と云はうか、兎に角普通の人間の出来ぬ事を白晝平氣でやつて居る、少しも恥かしいなぞ思ふては居らぬ。奴等の胸には技術家と云ふ別世界があつて此社會の人間のする事は凡俗の奴等の批評などには乗らぬものと心得てゐるから面白い。

不思議なのは此行列の途中誰れ獨り肝腎の金主の新入生に氣を付ける者の無い事だ。初て來た奴ではあるし而も其人の御蔭で一杯遣れるのであるから、少しは愛想もありさうなものだが、誰れ一人見向もする奴がない。當主は後からスゴく踵て行く。實に淡泊極まつた話だ。

酒屋へ着くと歌は愈々烈しくなる、亂暴は募つて來る。舞踏をする鯨はこ立をやる、大聲に演説をする。其内に給仕人が注文を聞きにやつて來る。萬事メチャ苦茶である。吩咐る酒も十人十種だ。葡萄酒もやる、ビールもやる、コンニヤクもやる、リモナーデも好き各各勝手氣儘に注文する。聽て二口三口飲んで一座漸く治まると、ソコで新入生にとつて大變な事がオツ始まる。

之が仲間入の藝當で、これは是非やらねばならん。幹事が起立して之より新入生〇〇君の藝當始まりくと怒鳴ると、一同拍手では非々々と所望する、少し躊躇すると氣早い連中は傍へ來て無理矢理に引連れて何かさせるまでは承知せん。

僕の入學の日には丁度、布哇から來た米人と獨逸人と僕と三人の新入生であつたが、先づ布哇先生テーブルに飛び上つて布哇名物カナカ土人の尻振踊をやつた。尻を振り始めると一同テーブル、コップ、戸、障子、何でもかでも手當り次第のものを叩きながら五六十人一齊にラララーラーと拍子をこる。其喧ましい事は何とも云へない。之が濟むと此度は僕の番だ。

爰で一寸入れ度い事がある。此藝當と云ふ奴をやらされたのは此時が始めてでない、此以前には幾十度となくやらされた、之には實に閉口するが併し西洋へ行つた以上は何處かで必らずやらされる。之は仕方がない、此覺悟は誰も西洋に足を踏み出す人は持たなければ

ならん。今迄西洋へ行つた連中で此一條で非常に苦んだ先生方が多くだらう、又珍奇の話もあるであらう。兎に角、イザと云ふ場合には少しも閉口せずに出す事の出来る丈の何か歌なり詩なり踊なりの藝を豫め用意して置かねばならん。

之で思ひ出す事がある。二十三年の夏米國に居つた時ムーデー氏の夏期學校に在留日本人の學生一同か招かれた事があつた。ある時、何かの祝賀會の時であつたと思ふ、米國各地の學校其他英國、佛、獨を代表して居る學生連が夫れく自國の歌を謠ふから日本も自國を代表して何かやれと云ふので日本人連中集つて相談をした。相談はしては見たものゝ素と元何も知らぬのであるから話が纏まらない。

何でも文句は西洋人に分らぬから可成皆なの能く知つて居るものが
善いと云ふので「一ツトヤ」を遣ッ付けろと云ふ事に一決して、そ
れから一日稽古をした。併しこの數へ歌でさへ中々旨く行かん。
が、トゥ／＼稽古をして當日出たが佛蘭西人のマルセイエーズ、獨
逸人のラインの歌の後で、聴衆には分らぬとは云ひながら五六百人
の前で一同高座に上つて、髯の生へた立派な連中が「一ツトヤ」
を歌ふのだから耐らない殊に「五ツトヤ」いつも變らぬ、とし男く
お歳をとらずに嫁をとる」の一段に來た時には自分ながら腋の下に
汗をかいた未だ能く覺えて居る、此時の音頭とりが今の貴族院議員
の三島彌太郎君だ、それから歌つた連中には大分今日の紳士連があ



新入學生の屋敷へ行く行列

る、名を一々擧げる必要もあるまいが、今の第一銀行の市原盛宏君
なども確か合唱連の一人であつたと思ふ、何でも皆んなで十五六人
一緒だつた。

さて話が外れたが、順が僕の番に来た、仕方がないから詩を吟じ
て御免を蒙つた。布哇先生も僕も非常な拍手喝采で濟んだ。二人は
無事にやつて除けたが次の獨逸先生は如何しても遣らない。此人は
餘程柔和な人であつたが、知らないか、知つて居るのか、如何どう勸めら
れてもやらない。所で何となく仲間外れと云ふ様な風になつて來て
例のジュリアン得意の悪口が四方八方から降つて來た。此先生幸に
佛蘭西語が通じなかつたから悪口も左程に感じなかつたらうが若し

解かつたら穴にでも這入たく思つたであらう。

此酒屋の會合が新入生の紹介見た様なもので其時の仕打で大概新入生の人物を鑑定して仕舞ふ。活潑な奴か優柔の男か、話せる奴か話しにならぬ奴か大概見當がつく。實に新學生にとつては大切の場合である。此時にへまな事をするに在學中の愚弄物、嫌はれ物になる。

現に今の獨逸人なども其翌朝、坊主の衣を着けて、苦虫噛み潰した様な面をして居る肖像を描かれて壁上高々と懸けられた。此ポンチ畫と悪口が學生の武器で、時によると竹槍で横ッ腹刺される様なポンチ畫の似顔が壁に出る。

氣の毒の事に此獨逸人は在校中皆の弄び物になつて居つた。ある時（之はジュリアンがルユー、ドラゴンと云ふ町に移つてからの事であつた）稽古中俄に四五人の學生が鄰室に引込んで頻りにゴト／＼やつて居ると、其内廳て一人の男が二尺許りの燒鐵棒を持つて來た。鐵は眞赤に燒けて居る、そして棒の元を濡れ手拭で巻いて握つて居るが火氣でポツポツと湯氣が出て居る。

此棒で、例の獨逸先生を攻撃すると云ふ趣向だから耐らない。先生早速椅子を離れて逃げ出したが、他の連中なか／＼室外に出せばこそ。先生一生懸命蒼くなつて逃げ廻つた。僕は惡戯にも程がある、之は餘り酷いと思つて居ると、其時に丁度居合はした生徒の中にハ

ツチソンと云ふ男があつた。此人はカナダから留學して居つた學生で至極着實な又た義俠に富んだ男で平素から學生の亂暴を嘆息して居つた、少しジュリアンには不相應の變り者であつたが、此先生此惡戯を見ては最早耐へられない、蒼くなつて止めに往つた。鐵棒を持つて居る男と獨逸人の間に這入つて止めたが中々止めばこそ、トウ／＼迫り迫つて、ハツと思ふ間に燒鐵を横ざまに獨逸先生の頬ツペタに押し付け反す刀で又た仲裁人の頬へも打付けた。

コレワと思つて見ると面白い、獨逸先生の面は朱だらけ、仲裁人の面も手も眞赤、燒鐵は木の棒を寫實的に繪具で塗り上げ熱湯につけたる手拭で元を握つて居つたと云ふ趣向。満室拍手喝采飛ぶやら跳

るやらの大騒ぎ。仲裁人も餘りの馬鹿氣さに果ては腹をかゝへて笑ひ出した。こんな美術的の惡戯は時々やるが併し新案の犠牲に供せらるゝ奴はいつも眞面目な充分弄び甲斐のある男に限る。斯様の惡戯は臨時で其度々の新案に任せて有志の連中がやるのであるが、此外に御定りの奴がある。是は大概の新生生はやられる。其中の一つが大鏡の狂言だ。之は雨天の時に光線が弱いので連中の一人が来て「事務室に大鏡があるから行つて持て来い、暗くて仕方がない」と云ふ。使はれるのは新生生の役目であるから事務室に行つて大鏡の話をする、事務員はニコ／＼と笑つて返事しない。利口な奴なれば、此時にヤラレタナと氣が付く、馬鹿な奴は眞面目に報告すると、

サー一同で夫れから夫れと善い慰みものにする。

中には性質の善くない悪戯がある、スコットランドから来て居た若い學生が居つたが、此先生少し輕卒な性質で、至極好人物だが、國自慢が病で、ナンデも蘇格蘭土でなければ通らない、仕舞には皆ながグラスゴーといふ綽名を附けた。

此先生、此位の男であるから中々の剛情者で、人の忠告や、教師の云ふ事などは聞き入れない。友人が自分の描いたものを批評する事でもあれば中々承知すればこそ、何でも自分の作には間違ないと思つて居た。コンナ男が一番慰者になる。此男が學校中の憎まれ者になつて居る最中の事であつた、ある男子のモデルを稽古して居る時

丁度教師の廻つて来る前にグラスゴーの小用に降りて居る間に誰かやつたか先生の描き終つて居た裸體畫の陰部を眞物大の二倍位に延して置いた。グラスゴー用事を済して昇つて來たが訂されたとは少しも氣が付かない。聽て教師が廻つて來て、サテ、先生の作の批評に取掛ると教師驚いたの驚かないの「コリヤ餘り太過ぎる」と直すとグラスゴー例の反し詞で、イヤと云ひながら見るとイツの間にやらステキに肥えて居るので、此時には道が剛慢のグラスゴーも謹んで教師の云ふ事を容れた。

こんな串戯もやるが併し勉強する時には實に眞面目に勉強する。無論教師は平日畫室に居らない。教師どころか生徒の外には事務員も

居らん。監督者と云ふ様な人間は影も見えない。生徒自身が監督者で、畫室の中の事は誰が何と云はふが聞かぬ。又た統御者の様なものが居つた所で孰れも一騎當千の亂暴者であるからソナ人間の云ふ言は誰も聞くものはない。實に自由も自由、勝手氣儘の人間の集りだ。併し此我儘の人間もモデルの形或は色の善いのに逢ふか、又た佳境に入つた時には一生懸命に勉強する。大概一週間の初に新モデルが出て、其手本の大概を描き入れる時にはシーンとして唯木炭の紙面を擦る音のみ聞えて息も迫る様に一生懸命勉強する。遊ぶ時には犬ツコロの様に遊ぶ、勉強する時は全力を盡して勉強する、コレが學生の風だ。

併し少しでも飽いて來ると決して黙つて居ない、第一が口笛でそれから誰か歌を謠ひ初める。それも佛蘭西の歌計りではない。生徒は各國から集つて居るのであるから、露西亞も出る、米國も出る、英國も出る、伊太利も出る、葡萄牙も出る、瑞西も出る、希臘も出れば波斯も出る。各々自國の歌をやる、無論自分の畫は描きながら。時に甘く其國歌をやると一同其の國の萬歳を唱へる。丁度僕の居た頃は露佛同盟の風説が盛んな時であつたが日々四五十遍露西亞の國歌を教室で聞かなかつた事は無かつた。之が學校であるかと思ふと不思議な様であるが、論より證據、此亂雜な學校で出来るものが鹿爪らしい、規則立つた學校で出来るものよりも十倍も百倍も善いと云

ふのが面白い。

學生の退屈を醒ますは歌も一つの手段であるが、其外に未だ種々ある。假色こはいろ—其當時有名な役者の假色も其一つだ。時々自慢に其節評判の筋をやる、一座感服して謹聽する時もある。又た屢々やるのが動物の假色で犬、猫、猿、豕、羊、雁、鴨、鶏を初めとしカンガルでも象の假色でも一同負けず劣らず一生懸命にやる。之は各々夫れ々得意の受持があつて初は一人一人やつてるが後には一度に出すのでノアのアーケが難船したら斯様であらうと想像することもあつた。

一番僕の感服したのは西班牙とか葡萄牙とかくら巴里に来て居る銀

行の頭取の子息であるとか評判のあつた男の藝だつた。此男は當時亂暴者の首領であつたが凡そ物真似と來たら、身振でも、口真似でも此男に叶ふ奴はなかつた。此先生の最も得意なのが「ドーヴァー海峡」の一段で旅客が乗船する時から途中船に苦しむ所まで眼前に見る様に真似する。友人で此話を聞いて胸を悪くした奴があつた。一體奴等、物の癖を取つて、人に感を興へる様に表はす事に於ては非凡の技倆がある。爰が美術家だ。

一體が斯う云ふ風であるから、此道場に別段喧やかましい規則の様なものはない。學校とは云ひながら、出るも出ぬも勝手次第で、競技はあつても試験と云ふものは無い只だ時の氣の模様で休みたければ休む。

勉強したければ勝手に勉強する、何事も常人の氣儘に捨て置くこと云ふ話だ。併し誰れでも若し學生一般の意向に反對な事をするか、或は云ふかすると例のワイ／＼で直ちに打潰して仕舞ふ。詰り多數の自裁で萬事やつて行くのである。

所が人間と云ふ奴は人種こそ異なれ慾には大した相違がない、希臘人でも安南人でも十二時が近くなれば腹が減ると云つた様なもので望む所に甚だしい違ひが無いから別段堅苦しい規則を製造しなくても旨く行く……四五月頃になつて晝室は少し暑くなつて来る。ブルヴァールの並樹が芽を吹き出して来る。馬車の音が何んとなく陽氣に聞えて来る。サアさうなつて来ると冬中四五ヶ月の間日々蒸暑

い空氣と煙草の煙に燻られた學生は飛び出し度くて耐らない。厭氣ながらモデルと首ツ引をして居ると、丁度其時に町の角で乞食が手風琴をやり始めるウォルツの調子に浮れ出す。最う辛抱も我慢もして居られない。

突然學生の一人が起立して演舌する「諸君、我々は馬鹿です、氣狂ひです。此美しい春の日に我々の如く穴にもぐつて馬鹿な眞似をして居るものが廣い世界に又たとありませうか我輩はこれより野外寫生と出掛けます。諸君如何」賛成々々の聲が湧く「實に我々は馬鹿者だ、氣狂ひだ」仕舞へ／＼と云ふ様な聲が聞える。急に晝板を拭ひ出す。筆を洗ふ。ポトポトオリオを仕舞ふ、晝架を片付ける。モ

デルも臺を飛び降りて衣裳を着けると云ふ様な譯で二十分後にはシーンとした空家になる。學生はサン、クルーの森に行くもある、マルンの河畔に新柳を寫生に行くもある、尙ほ一層奮發して遠征と出掛ける連中は一夜泊りにバルビゾンにミレーの舊家を訪ひがてらフォンテヌブローの森の寫と出かける學生もあるだらう

前の様な調子で學生は自由、自在、勝手氣儘で己が意の通り馳せ廻る不規律極まつた人間で技術の外には天下に尊いと思ふ者もなければ、恐いと考へる人もないが、此亂暴者が青菜に鹽、猫の前の鼠の様に閉口してグーの音も出ないものが天下に一つある。之が教師である。實に教師の前では平素の悪口は勿論の事碌々聲も出さない。巴里

美術學生と教師の關係と云ものは敬仰、服従の點に於て神様と信徒の様だと云つて差支なからう。學生にとつては師匠の一言一句は無論の事、御尊體を拜するのさへ有難い。實に美術の生佛様である。

教師は大概一週間に二度来る。教師の来る日は定まつて居て、其朝になると生徒の様子で何んとなく解かる、描き残りのある者は一生懸命仕上げを爲て居る、仕上つて居る者も尙一層調べて研究して居る。皆な忙がしいドーズ一言でも快い批評を先生から得たいと云ふのが學生の心願だ、之より外には何の慾も無い。

教師が校舎に這入つて來ると直ぐ分かる。俄に學生がシーンと靜つて仕舞ふ、誰一人座を離れる者もない。先生は畫室に入ると直様入



教 授 の 批 評

口に近い所から當り次第に書架から書架と順次批評をして行く。所が大勢の學生の事であるから中々長々しい事は云つて居らぬ、大抵二言か三言位で「善し」「此調子が間違つてる」「大して悪くもない」「姿勢が丸で狂つて居る、駄目だ」など云ふ詞が普通で、自ら筆を執つて直して呉れるなど云ふ事は實に稀だ。併し「大して悪くもない」など云ふ詞を頂戴した時の嬉しさ、此嬉しさは實驗した事のある者でなければ分らない。ゾーツと身に染む様に嬉しい。其晩は考へ出して眠られない。

所が「大して悪くもない」など云ふ御言葉を頂戴する事は中々出來ない。褒められる所ではない、大勢の中でピシ〜と悪口を云はれ

て穴にでも這入度い心地のする事がある。無論教師も皆生徒の境遇はやつて來て居るのであるから、悪口、皮肉の批評は上手だ、實に上手だ。氣の毒で他人ながら手に汗を握る事がある。

「コリヤなんだ、コレは何んの積りだい。之が手だと御前何歳、三十？。繪具箱を仕舞つてお歸り。田舎で芋を掘つて居た方が善い」など云ふ批評が年に二三度は必ず出る。

之は必らずしも生徒の作が悪い爲めに出るのではない。時の先生の機嫌にも依るだらうが、併し悪い機嫌も生徒の作の善い爲めに直る事もある。畫室にやつて來る時は澁々顔でも出る時はニコ／＼とメシユアーの前置で愉快に挨拶をして歸る時もある。兎に角、一種の別

世界で人間の全體が技藝と云ふものに全く捧げられてある、他心の
ない無邪氣な、他から見れば不思議な社會だ。

丁度僕の入學してから三四日経つての事であつた、フェリエー先生
がやつて来て烈しいのを喰はした。此時の生徒は五十近い男であつ
たが、他の事なれば命も捨てゝ撃つて懸るだらうが、技藝の評言計
りは黙つて聞いて居る。學生一同も其生徒の作を圍んで教師の云ふ
小言は一言も聞き洩さぬ様にする。之は悪口の時のみでない、平素
でも教師が来て直す時には畫架から畫架と教師の後を生徒一同ゾロ
／＼と付き纏つて一言半句の詞も聞き洩さぬ様にする、殊に、其中
でも學生中腕の善い奴の作の番に來ると豫め此點を何んと云ふかと

云ふ缺點を見付出して置いて、教師がどんな處に氣を付けるかと注
意する、若し自分の考へて居つた所と符合する事でもあれば、一寸
嬉しい。

此時にやられた先生なども腕は中々善い男だつた、日本で云ふ大家
先生などは中々側へも寄り付けぬ腕であつたが、併し兎に角十年も
十五年も引續て勉強し、而も世界各國から來て居る、生徒とは云ひ
ながら、孰れも七八年の辛苦をして其仕上げに來て居る連中の中
あるから容易な事では満足は與へられない。夫れに形も色も喧しい
から手は手、足は足らしく見て呉れる様になる迄には容易な事では
なれぬ。實に藝術の教授法は酷だ。

此學校には卒業と云ふものは全く無い。だから生徒の中でも十年來て居るとか十五年來て居るなど云ふ連中は珍らしくない、腕も善くなる筈だ。併し此様な男でも時々教師から五つ六つの子供同様の取扱を受ける。兎に角教師の批評には遠慮と云ふものが無い、勝手次第、心に浮び任せの事をズン／＼云つて行く、僕が學校に入る少し前に死んだブーランジェーといふ名家があつたが、此先生は又たエライ直言家であつたさうな。或時例の通り直ちに學校に來て、部屋の端から端へと次第に見て行つたが、一言も云はない。

スツカリ見終つて、出口の處へ來て「此奴等こいつらに罌丸のクツ付て居る男は一人もない」と云ひ捨て儘一言も云はずに行つて仕舞つた。

教師は斯様な直言がドレ程の奮發心を生徒に起さすか、ドレ丈の結果があるかをチャーインと知つて居る。之を見ても生徒がドレ丈教師を信じて居るか、如何に敬服して居るかど解るだらう。生徒は教師に何んと悪口を云はれ様が、耻を搔かされやうが、少しも怨まない、怨む所では無い、一層奮發してドーにかして一言でも嬉しい辭を貰ひたいと愈々勉強する。爰が技藝教育の面白い所で、佛蘭西が近來他國に拔んでゝエライ美術家を續々出し殊にテクニクでは世界の先導者となつたは斯う云ふ教育法で人間を鍛へ上げたからである。馬鹿な人間も一人前の日傭取に仕上げると云ふ今日普通の教育法ではズ抜けた人間は出來ない。

此荒ッぽい教育法で鍛練すると技藝家の根生が出来る様だ。技藝家の根生と云ふは外でもないが、スラットした、延々した、イジケない正直な、活潑な人間が出来る。先の眼色や鼻息を窺つて此方の考を製造しやうと云ふ様な根生が無くなる、之に従つて他人と自分と云ふ區別が判然として獨立と云ふ所が堅固になつて来る。此獨立と云ふ奴が技藝界に取つての最肝要なもので、變化のない人間許り居る世の中になつたなら技藝といふものは無くなつて仕舞ふ。オリチナリチー、獨創と云ふ奴は人と同じ様な考を持つて居る者には出らん。人が左と云へば右、右と云へば左と云ふ様に常に反對の根生がなくチャー起つて來ない。コイツが眞の美術家の根生で、獨立と云

ふ考がなけりや、變化がなくなるそれから此酷な教育法でやると出來上がる學生に人間の屑が少い。完全と云ふ考が強くなつて來る、メヂオクリチー、平凡、中途と云ふ奴と胡魔化し、善い加減と云ふ奴を嫌忌する一種の根生が出て來る。此奴も技藝家に取つては最も必要である。佛蘭西の美術が彫刻でも繪畫でも古來見た事のない確かりしたテクニクを出したのは實に偶然の事でない。併し此教育法は善いだけに辛い。第一餘程良い無理に耐へられる體を以て居る者でなければ到底辛棒が仕切れない、三ヶ月と辛棒が仕切れない。僅か二十坪か三十坪位の部屋に閉籠つて、空氣も碌々通はぬ様に閉ぢ切つて五十人の生徒とモデルを裸體にしても差支へない

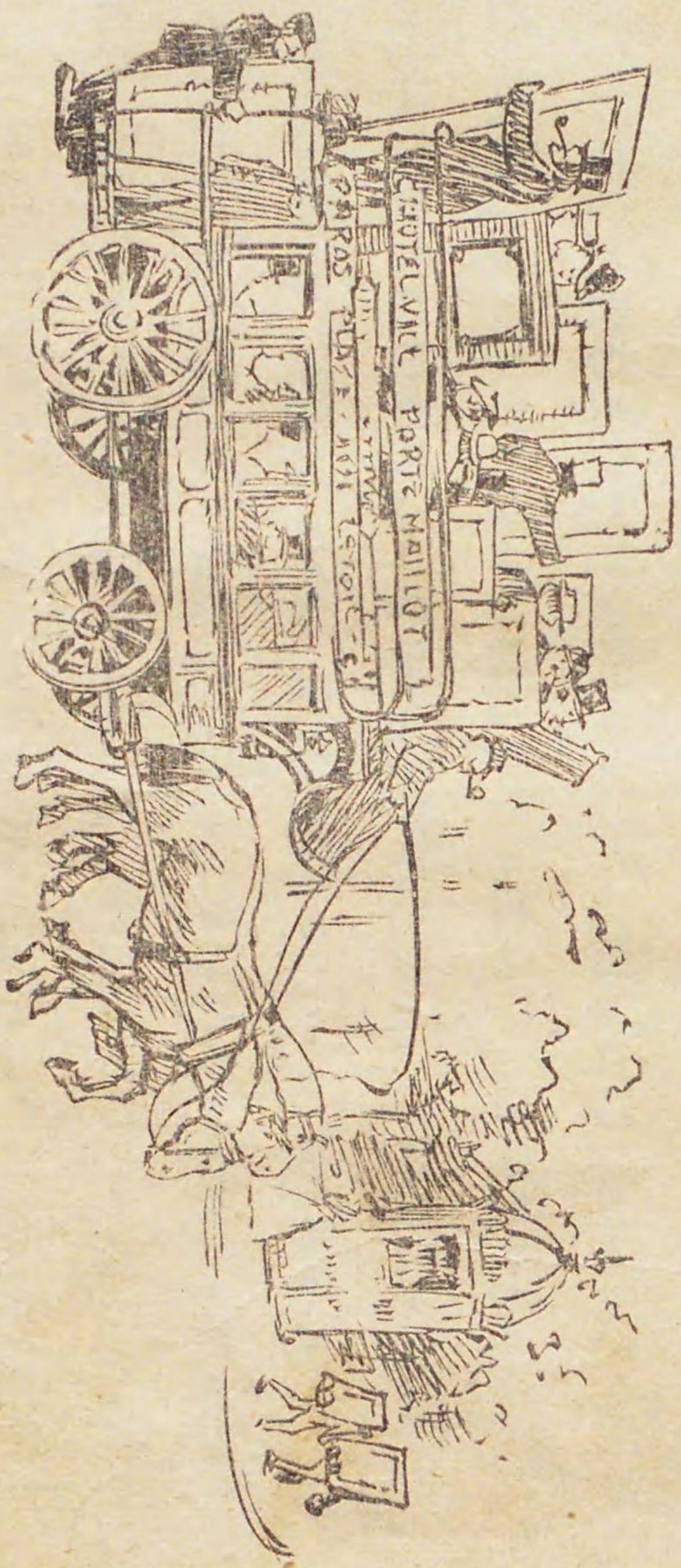
丈に夏冬の構ひなくストーブをカン／＼燃いて三四十人のバク／＼吹出す煙草の煙に巻かれて、朝の八時頃から夕の四時頃迄コック／＼遣ると云ふは中々一通りや二通りの體では永く續くものでない。世間では美術家とか何とか云つてエライ呑氣な様なものと思つて居るが實際技術の修業と云ふものは決して小説家の想像する様な樂な呑氣な色男のする仕事ぢやない、頭を使ふ事に於ては本を讀むで無圖かしい問題を判斷する學者と違はず、又た勞働と辛抱の點で云へば土方と大した違ひはない。

修業の辛い上に美術學生は學資と云ふ奴で他の學生より一層に困難をする。中には金満家の子息もある、又た金満家と迄行かぬとも豊

かに資金をもらつて居る者もあるが併し美術學生と云へば大概不充分の學資で支へて居るのが多い様だ。茲に於ては西洋も日本も變らない、「美術家貧乏」と云ふ事は昔から一の諺にまでなつて居る位だから親にしても親戚にしても其家から美術家なんて云ふものが出るのは餘り感心しない。感心しない位だから學資などは出さう筈がない。出ないから仕方がない乞食同様の姿で勉強しなければならぬ。昔しから西洋の大美術家と云はれた人の傳記を見るのに子が繪かき彫刻家になると云ふ申出に對して双手を揚げて大賛成を表した親の話は聞いた事がない。唯だターナーの親のみが其の例外である。併しターナーの老爺は理髮床の主人だつたと云ふ事を記憶しなければな

らぬ。若し役人とか代言人でもあつたなら無論不賛成不承知であつたに違いない。之は一通り無理でないと云ふのは凡そ職業として美術の修業位の前途の不確なもの少ない、又た出来損なつた美術家位を潰しのきかぬ厄介な者も少ない、可愛い子供を乞食にしたくないと云ふ親の考へは尤もだ。

理窟はさて置き實際の所不十分な學資でコツ／＼勉強して居る美術學生が多い。英吉利獨逸から來て居つた學生にも貧乏で／＼實に可哀想なのがあつた、部屋は五階か六階の上で漸々小机一つに寢臺を容れる丈けの場所しかない薄暗い小便臭い所に城を構へて食事は自炊、洗濯も大概は自分、夜は油代儉約に運動と出掛けるか左もなく



貧乏學生乗合馬車を作つた場合運搬

ば比較的富有の友人を訪問して一夕を過すと云ふ様な連中も居つた。

だが、巴里の外國留學生は美術學生としては割に呑氣に見える。之は巴里が他の市と異つて到底外國人として自分の技術を賣つて金を取る望みがないので初めから相當の學資を用意して來るからであらう。實に巴里では一通りや二通りの腕で藝を金にする事は出來ぬ。外國人の巴里へ來る旅客で一番散財をするのは米國人であるが其の亞米利加の學生でさへ巴里在留の本國人から金を取ることは中々出來ないさうだ。亞米利加の女學生などは巴里見物にやつて來る同國の金持の通辯などをして學資の助けとして居るが中々暮しに困難な様

子だ。

前に云ふ通り學校の修業も亦た貧乏生活も随分困難ではあるが巴里は此困難に對して美術學生に酬ゆる丈の愉快を備へて居る。教師の小言に落膽した連中を奮發させる美術館がある。尙ほ一層落膽の餘り最早人間界が厭になつた連中にはクロコダイルやアルツバカを友として一日を過すことの出来る動物園がある。

〇六

六階の頂上に寒中火無しに震へてる學生も美術家俱樂部に行けばドーン／＼と火が燃えて居る暖爐の傍で馬鹿ツ噺に面白を可笑しく一夜を過すことも出来る。平生は節儉に節儉で唯だ腹を空にせぬだけに止めて置く連中も少し奮發すれば僅の散財で到底他では同類の腹に

這入らぬ御馳走の喰へる安飯屋がある。一週六日畫室に閉込められた貧書生も日曜には僅かの費用でミーユドン。サンクルー。スレスンの森に終日を暮すことが出来る。古道具、古本の道樂者にはケイの手見世がある、丁度今頃だ、セイヌ河畔の並木が芽を出した時分にブラリ／＼と古本屋を素見し、掘出し物を目當にムウツと黴臭い古本を是れかあれかと掘廻す其の心持は何んとも云へぬ、本道樂の極樂だ。

一六

夫れから夜になれば夜相應の場所がある。芝居好には立見も出来る、助平連には三法の夜鷹も居る、カツフエーに隣席の美人を己が手の者氣取になつて一夜を過すもよし、ブルヴァルの小間物店に一萬法

フラン

のダイヤモンドに眼を飽かせるもお安い事。萬事コンナ調子で貧乏書生には貧乏書生丈に他の市で一寸得られぬ快樂と利益がある、他の富豪書生同様立派に美術の刺激を受けられる機關が備つて居る、茲が巴里の巴里たる所で美術教育地として他市の眞似の出來ぬ處である。

是等の種々備つて居る快樂の中で美術學生生活の大半を占めて居る、云はゞ半公半私とも云ふ修業半分愉快半分の仕事は美術館への參詣だ。實に美術館は學校に次での教育場で、學生は美術館と學校の間に修業して居ると云つて善い。此美術館にも種々ある。古代、中古、ルナサンス、近代の美術、美術工藝の歴史的名作を研究する者はループ

ルへ行く。現代の繪畫、彫刻を研究する者はルクサンプールへ行く。建築の研究者はトロカデロの建築歴史參考館へ行く。此外に東洋の技藝に凝つて居る連中はギメー美術館、中古の藝術を調べる者にはクルニーの古寺がある。此外にミューゼ、カルナヴァレの歴史博物館がある、孰れも夫れ々々専門の方面に向つて蒐集し、夫れ々々其美術館所屬の學者が研究に研究を積んで、常に材料を増し、區分を精かにして居るから學生に採つては有難い場所である。

尙ほ此外に學生の行くべき場所がある。之が中古以降の建築で、此點に於ては巴里自身が立派な美術館であると云つても差支へない。寺院建築としてはゴシック最良の建築の標本の一として數へられて



麥酒店の學生

るノーツル、ダムがある、サン、ゼルマン、オーキセロワの寺院がある尙ほ溯つてローマ子スク時代からゴシックへの變遷時期の建築を調べたい者にはサン、ジェルマン、デ、ブレの寺院サン、ドニの寺がある。復興時代の建築ではルーブル。ルクサンブール、少し廓外に出づればヴェルサーユ。サン、ジェルマン。フォンテヌブロー。シヤンチー。コンピエンヌの宮殿がある。近代の建築としてはパンテオン。マドレンヌ。オペラを始めとして大小美術館さては新美術を隅から隅まで施したニヨロく／＼デレ／＼した最近の建築に至る迄到底算へ切れぬ程澤山ある。夫れから建築裝飾畫の研究をしたい者にはソルボンの裝飾、美術學校講義室の壁畫を始めとして、パンテオン。

オペラ。オペラ、コミック。ルーブル美術館の裝飾、之も一々數へ
切れぬ程ある。

此外に年々五六月の頃に開かれる兩サロンの展覽會を始めとしてチ
ヨルヂ、ピチー。ヅラン、ヅエルの様な家に開かれる私設展覽會を
算入すると學生に取つては中々三年や四年で頭の中に入れ切れぬ程
の材料がある。日本を出る時には大抱負を持つて巴里美術界征伐と
云ふ勢で出掛けた先生方が、扱行つて見ると其材料の多いと中々力
の及ばないのに閉口して「到底駄目だ、おッ付ない」などと泣言を
出すのは無理でない。小ッポケな處から想像しては西洋の美術界な
ぞ云ふものは何の事だか見當も付ない。併し是程の處を現在目撃し

ても「ナアに巴里と云つたつて知れたものだ」なぞとスマして居る
變り者がある。是等の人間は何を見ても少しも感の無い無神経か左
もなくば質たちの一層悪い己が商賣の側がわから割出した喝おほし策を振廻して
居る不埒な奴等で到底何を見せた所で正直な音ねを吐く生物ぢやない
又た若し正氣で云つて居る奴なれば話にならぬ氣違ひだ。感服すべ
きものは感服し驚くものには驚くが當り前、それを驚かぬ振をした
所で少しもエライ所は無い。こんな連中が國を危ると云ふもので、此
ンナ奴等が屁理窟を並べて煽おだ立たお蔭で日本の美術殊に美術工藝は
どの位損をして居るか知れない。美術工藝なぞ云ふものに就ては善
い所は異人から皆な採られて今日では「椽の下の骨を見ろ」と云は

れて居らぬ計りぞ。中には實際「骨を見ろ」と云つて居る奴がある
だらう。夫れでも自惚と云ふものは烈いもので今だに日本の美術と
か工藝とか云つて獨でエラがつて居る連中が澤山ある。此鹽梅で行
くと丁度伊太利亞がレナサンス時代の美術に威張つて安心してトウ
／＼今では諾威ノルウェーや瑞典スウェーデンの尻に陥ちて仕舞つたと同様日本の美術も
アルゼリヤ美術や布哇美術の後に引摺り落されるかも知れぬ。他人
の力量を觀破する明めいのないに付けて加へて自惚が強いとドンナ事
なるか先が知れない。馬鹿な奴程恐しいものは無い。

學生は學校に行か又た美術館に行くのが業務である。普通は學校に
行くのであるが少し氣持が悪くて學校では勉強が出来ぬとか、又た

何か考へる所があつて古人の作を見なくなるか、或は少し飽氣いゃが差して蒸氣の缺乏を感じて來ると學校は止めにして美術館に出掛ける學生は美術館を學校同様の研究場と心得て居る。中には學校よりもルーブルに一日を過した方が遙に利益があると考へてる者もある。少し思慮のある學生なれば美術館から出て來る時には這入つた時と決して同じ心持では出て來ぬ。何か新しい考を起して來るか、一層の奮發心を持つて出て來るか、又た悪くすると這入つた時の勢も挫けて閉口の體で出て來るだらうが、兎に角同様の人間では出て來ぬ。偶學校の競技に勝つて我こそはと思ふ得意の先生も一度ルーブル。ルクサンブルの作を見ては大概の自惚は醒めて仕舞ふ、之がどの位

藥になるか知れない。落膽して居る奴も傑作を見ては奮發をしやうし、少し位頭の足りぬ奴も大家の作を見ては自然と覺る所がある様になる。美術館は學生の病院の様なもので、此病院に節々行く必要があるし、又た實際頻りに出入をする。

學生は各々此美術館に自分の守神様と崇め奉つて居る本尊がある、此本尊の前に行くのが楽しみである、楽しみ所ではない有難い。時によると崇拜の餘り嫉妬を起して來る。斯うなつて來ると其作者計りに熱中して他の人は一切構はなくなる。ヴェラスケスを神様の様に尊敬する奴もある。ルーベンスを佛の如く思ふ奴もある。ミレーを師と仰いで虹の圖の前に眼を据える學生もあれば、ポチチエリの聖母に

願かける者もある。其他ピエツキースの壁畫、モネーのアプレッ
ション、十人十種で學生の性質、修業の具合で夫れ／＼考は異ふが
古來數百の大家の中誰か自分の理想を現表する人を撰み出して其人
其製作を敬愛する。

此の守本尊の自慢比べ堅苦しく云へば比較研究が學生間の生活の中
々大部分を占めて居る。一日の業務が済むと大概は夕方から友人の
處に出掛ける。又は親友を誘ふて夕食をやりに出懸ける、孰れにし
ても話相手はある。斯様な場合に幸ひにして同座の者が同じ流派同
じ崇拜の本尊であると至極圓滑に行くが不幸にして舊教と新教、モ
ルモンとクエーカーと云つた様にクラシック好とロマンチック崇拜

家と云ふ調子に到底根本から折合の付かぬ宗旨では大變な議論が持
ち上がる。議論の果には組打になる事もある、親友の間でも十日も廿
日も口を開かぬ事もある、時に依つては其儘絶交となる人もあるだ
らう。爰が學生氣風の一寸氣を付けべき所であると思ふ。外國の學
生は各々自分の信する儘に敬愛する大家を崇めて他人の本尊様と自
分の本尊が異つて居るのを少しも意にしない。之は外國人であらう
が三千年前の古人であらうが時と場合には少しも頓着しない。斯う
云ふ氣風だから巴里の眞中に居つても他の俗物がヤレ異教國のもの
ヤレ未開國のものと擯斥する其間に北齋や歌麿をラファエル。ミケ
ランジ同様に敬慕信仰する者も出来るのである。之を思ふと西洋の

物と云ば一概にこなし付ける攘夷風の技術家とは同日の論でない。併し其代り自分自身の感服しない奴なれば大家であらうが、古人であらうが人傑でも偉人でも少しも頓着しない、「何處の馬の骨」か位の者だ。立派な定評ある技藝家に對してさへ此始末であるからヤレ審美學者とかヤレ美術批評家とか云ふものに對しては一般に無頓着で誰も理窟の爲めに自分の技術を免や角變へる者もない、又た實際千部萬部の學者の講釋が少しでも技術に利益を與へるものとは思つて居ない。殊に新聞の美術評とか美術に關する所謂學者の議論など云ふものは屁の屁粕とも思つて居らぬ。外國の美術學生の様子を知らぬ者は西洋の事であるから美術講演とか美術の著述などに對して



は定めて學生が熱中するだらうと思ふだらうが之は大間違で其無頓
着な事は甚しい。學生が所謂美術批評家など云ふものに對する考は
「アノ大山師メ」「畫かきの出來損ない」「喰ッパグレ」位の者でテンデ
始めから人間らしい奴等とは思つて居ない、之を思ふと美術には縁
も由ゆかりも無いパレットの穴へはどの指を入れるものかさへ知らぬ位の
奴等がテイヌカハマーソンの美術論の一二冊も讀むか左も無くば
ベデカーの旅行案内位を暗誦してヤレ博士で御座る、ヤレ學士で御
座るとか、ヤー伯爵で御座るの富豪で御座るのと技藝には爪の垢程
も因縁の無い看板を楯に技藝家に向つて講釋するのを、頭を垂れて
謹聽する連中とは雲泥の差も當ならずと云ふて差支へない。凡そ今

の世の中に馬鹿氣た滑稽な事は随分澤山あるが十年も二十年も専門の技藝を研究した斯道の専門家が代言人や役人や、哲學者を招待して前世にも縁の無かつた技術の講釋をさせて、それを鹿爪らしく謹聽する、甚しきは意見をさして閉口して居ると云ふ此位の飄氣た事は餘り無い。

招待して聽く奴も聽く奴だが、指圖釜しく知らぬ事を講釋する奴も講釋する奴だ。一方は其の馬鹿氣さに驚き、一方は其の横着さに呆れ反へる。マーク、ツウエインかバングスの様な文學者が日本に居たら腹の皮をよぢくる位の面白く書く好材料だが、甘くした物でコレ程の横着な人間の蔓はびこる土地には夫れ相應の書手かきてほか出ない。

さて斯う云つて仕舞ふと巴里の美術學生は獨立自尊で夫れ／＼城壁を構へて始終鋒を交へて居る殺風景不愉快千萬の人間で、定めて私交も薄情極まつたものであるだらうと云ふ感が起るかも知れぬが、之は大違ひである、彼等の間の私交は實に温かい、詰り淡泊極まつた飾り氣の無い、子供の様な人間が他事を打棄て技術と云ふ手遊を持つて餘念なく遊んで居ると云ふ話で、時々には喧嘩もし遠慮の無い悪口も云ふが交りは心からの交りである。ある時國許から銀行の手落で學資が滞つた、始めの内はシヨコラにパン、夕飯に宿屋から一皿のピフテキ位を取寄せて誤魔かして居たが愈々窮して來たから友人の許へ行つて事情を話して百圓近くの金を暫時借り度いと話す

と、六階の小部屋に居て罐詰と豚肉位で漸く生活して居ると云ふ貧乏學生だつたが誰も不便は同じ事と快く貸して呉れた。儲て借用證文は規定の通り書いて置かうと言ふと「串戯云つちやーいけないせ、友人から證文を取る様な己れぢや無い」と少し腹立氣に拒絶した。何んでも外國人は利慾一圖、交りの間には少しも餘裕の無い人間なご思ふと見當が違ふ。淡泊の交際は何處も同じ事だ、其の人間に依つて人種に依らない、現に其後同業者の友人に逢つて此事を話すと丁度之と反對の話を聞いた。此友人も學資が滞つたので當時在留の日本人中屈指の金持に一時借用を頼むだ、所がヤレ保證人とかヤレ何んとか云ひ立て五月蠅ので今度は此方から斷つたさうだ。旭日に

匂ふ山櫻も時々には夕日に臭い雪隠壺位の穢くなる事がある。

✓
段々と是迄話した様に美術學生は自信の強い剛情な亂暴者で勢こそ凄じいものだが彼等日常の暮し向き衣食住其他一般の社會觀から云ふと實に質素な無邪氣な慾氣のない人間で、一寸見た所では斯様な内部の威勢が頭の中に湧いて居らうとは想像も付かぬ程である。が其の無邪氣の中に萬事何んとかなく世の中を馬鹿にした様な調子は確かにある。是は世間の人と美術學生との考が相方に誤解をして折合の付かぬ爲めであつて一方では人間相手にならぬ呑氣者、シダラのないポヘミアンと卑下するか又は敬して遠けると云ふ風で普通の人間とは全く別人種として美術學生を扱ふし、學生の方では又た

「名利の外には少しも餘裕の無い凡俗世界の奴等は到底話しにならぬ、何んでも奴等の反對に出て遣れ」と云ふ算盤で割出し丸で初めから正反對に考へて行くから何事も常人の意表に出て行く様になるのであらう。此根性に今一つ貧乏と云ふ分子が加はつて來ると「コソ畜生」根生が何の邊まで進んで行くか知れない。美術家連が今だに中流社會の人間を嫌忌すると云ふのは此邊の所から出て來るのであつて、^{つらつき}面付の尤もらしい割に真底の根性の穢しい所が奴等の癢に觸るのである。

此んな所から推して行くと美術學生の行動で随分怪しからぬと思はるゝ節が段々と怪しかる様になつて來る。と云ふのは奴等の持つて

居る偏屈な考や奇怪な狂言は奴等の胸一杯の不平を洩す^{セーフチーヴァルツ}安全弁で随分極端な舉動も時々は遣るが、可愛想に極端な妙テコナ真似でも時々やらねば不平で不平で死で仕舞はなければならぬ。男一匹の持つて生れた純潔の志想と身にあらん限りの力を盡して描き上げた繪も裸體なれば風俗壞亂と云ふ杓子定木で人に見せる事も出來ない、其上に繪かき自身は助平繪かきと云ふ思ひも寄らぬ汚名を蒙むるのだ。クラシツクとか自然美術など云ふ高尚な所に眼を付けて大事な一生涯を眞面目に研究に捧げて、ヤット出來上つた所で其の結果は美術の美の字も解らぬ巡查にも敵はぬと云ふ有様では少しは人間持前の情性が頭を擡げると云ふのも尤もな話ぢやないか。世の中に殘

念な事は澤山あつても自分の信じて居る所が解せられぬ位な残念なものは無い、況して頭からブツ潰されては耐るものか。自由々々と云ふが自由は政事上の自由のみが自由ぢやない、土方には土方、美術家には美術家の自由がある、自分の感じない己れに必要な無い自由はドシ／＼潰して仕舞ふと云ふのは今時分御可笑な御話である。巴里には幸ひにして是程馬鹿氣た事は無いが併し美術と云ふものが社會一般から了解されて居らぬ所が未だある丈に美術學生に取つて不平の種、疳癩玉の肥料になる事が澤山ある。

所で「ヨシ其方がさうなら此方もこうだぞ」と云ふ様な心持から夫から夫れへと段々現はれて來る妙な現象がある。此の心持が美術

學生社會を不思議に面白くする原動力で時々七變人や八笑人の生涯を繰返して居る様な心持するのは全く此の心持の御蔭である。中には此の不平根性が全身に廻つて、到底全治の見込の無い奴がある。斯う云ふ病人に逢ふと、言ふ事爲る事皆腹の皮をよぢること計りで知らず／＼自分迄が感染して病人となつて仕舞ふ。

(未完)

藝
界
嚙
語

" They say the Lion and the Lizard keep
The Courts where Jamshyd gloried and drank deep :
And Bahrám, that great Hunter—the Wild Ass
Stamps o'er his Head, but cannot break his Sleep.

" I sometimes think that never blows so red
The Rose as where some buried Caesar bled :
That every Hyacinth the Garden wears
Dropt in her Lap from some once lovely Head.

" And this reviving Herb whose tender Green
Fledges the River-Lip on which we lean—
Ah, lean upon it lightly ! for who knows
From what once lovely Lip-it springs unseen !

Rupáiyát of Omar Khayyám.

藝 界 嚙 語

△今から一寸百年程前の事である、一歳コツペンハーゲン近傍に嘗て見慣れぬ南歐の草花が俄に咲き亂れた。不思議な事と段々其の因由を探つて見たら、當時羅馬に遊學中の彫刻家トルヴァルゼンが其作像を本國に送る時荷造に詰めた枯草が種となつて斯くも處ならぬ處に異様の花を亂れ咲かしたのであると云ふ事が解つた。

△此話は西洋の美術歴史家が一國一代の藝術の様式と云ふものは不思議に思ひがけぬ所から他派他流の影響感化を受けるもので交通と云ふものゝある以上は到底様式の變化と云ふ事は免かれぬ、支那風

の封港鎖國策を除いては他に絶對的に様式の變態を防ぐ道がないと云ふことを説明するによく引出す譬へである。

△何事も日本は日本主義、倭民族、大和魂、奈良の木像、雪舟の筆意、繪畫、彫刻、建築日本は日本の國風を守るべし、油繪、油土一切入るべからず主義の一派が極力西洋風美術撲滅を實行したのは僅かに十二三年前の事である。其十餘年後の今日では巴里龍動に現れた雜誌、繪葉書の新模様も五六十日後にはズン／＼と此方の新聞雜誌の挿繪表紙となつて出る、裸體畫問題、アールヌヴオーなど云ふ怪しからぬ文句が日々美術家の口から出る、文學者は見た事もなきソファエル。ミケランジェロの作、行つた事もなきフロレンス。ヴ

エニスの景況をワイ／＼云ひ囃す、さては巴里博覽會歸りの道すがら伊太利亞、獨逸を十日で走り通した旅人が羅馬彫刻はルクサンブールにかなはず、サン、マルコの寺はノーツル、ダームに似て居るなどヴエニス、伯林はさながら己れが貸長屋の如く説き出す所謂美術談が藝術の素養は扱置き鐵道切符の行先も讀めぬ連中の名前で日々新聞雜誌に版となつて現はれる、それを説く者は得意、讀む者は感服すると云ふハイカラ美術家極盛時代となつて來た。若し十餘年前に洋風美術の撲滅運動をやつた連中が眞に當時に説いた様な眞面目な考でやつたのであれば、今日こそは灰を被つて悲嘆の涙に咽ぶべき時である。

△考ふるに當時の洋風美術排斥連が失敗した重なる理窟が少くとも二つある。則ち其一は前に云ふ通り交通機關の備つて居る今日の世の中では到底藝術の變態は免かれ得べきものでないと云ふ事に考へが及ばなかつた事と、今一つは西洋の藝術と云ふものには幹もあり枝もある、此幹とは科學思想、自然研究を基礎として常に同一の方針に進むで居る様式で、其枝とは時の流行に由つて現はれ出づる一時的の様式である、西洋の藝術界では時々異様な變狀を呈して一時は古來の様式を全く打破して仕舞ふ様な外觀を現はす事もあるが、實は其下層にラテンはラテン。アングロサクソンはアングロサクソン人種の根性を基礎として嘗て同一軌道を離れずに進んで居る潮流が

ある、此過去の歴史を有ち未來にも亦此歴史を進めて行くべき西洋人の藝術と日本美術の融合と云ふものはドレ程の點迄出來得べきものであるか、其結果は如何なる形で現はれて來るべきものか、夫等の點には一向御氣がつかれなかつたのが失敗第二の理由である。

△一體西洋の美術史上亞細亞美術が混入したのは近頃になつて日本美術がやつたのが決して初めてでない、既に昔から幾度もあつた事で、而して其の結果は常に同様である。一時は東洋の様式が勢力を占むる様に見えるが後には必らず異物として排除されて仕舞ふか、或は全く消化せられて毫も其形を止めないに終つて仕舞ふのが常例である。十世紀後のアラビヤ建築は前者の例ビサンチン繪畫のシエ

ナ。フロレンス派に於ける、彫刻のニコラ、ピサノ一派に於ける皆後者の好例である。

△併し日本の美術が歐洲美術家の或部分を刺戟して大變動を起さしたことは事實である。事實も事實も一時は非常な騒動をやらかした。此騒動は西洋に中々の氣狂ひを出した。有名なるキツスラーは日本服を着けて龍動市中を歩き廻る。交際社會の貴女連中が妙な日本服を着ける。亞米利加の田舎までもミカド芝居が流行する。宮様くゝの歌とチツツウキローくゝの節はコロラド銀山の鑛夫までも口笛に吹くと云ふ様な有様で奇異、不可思議の日本は、現世にあり得べからざる樂土、奇妙奇的烈妙不思議「是非死ぬ迄には一度行つて御覽な

さい」的に廣告せられた。日本の赤兒は決して泣くと云ふ事はしない、など云ふ事が眞面目に本に印刷されたのが此時代の話で、此事は其後實際赤兒の泣いて居る姿を早取寫眞に撮つて本に出したので漸く世界が安心した。

△此以前から日本の美術に注意するものが續々出て來、従つて日本美術狂が現はれて頻りに日本美術の妙を説き、又た同時に美術品の蒐集家が出て來た。その中には種々の人間があつたらう。「サー爰で一儲け」と云ふ奴もあつたらうし、道樂でやつた奴もあつたらうし。己れが物識りを誇る材料に使つた者もあらう。慈善的に賞めた宣教師、外交的にをだてた政治家。或はバロン、メンハウゼン風に法螺一方

に賞め吹いた連中もあつたであらう。又能く探つて見たらば、其の實、勳三等にあり付き度いが一心でやつた拔目無き野心家もあつたらう、又た己れが本國の美術界に不平の仇討の材料とした連中もあらうし、又た中には實際心から感服して賞讃した眞面目の技藝家、批評家も大勢あつたであらう。兎に角其勢ひと云ふものは一時は凄しい事であつて、西洋美術の既往を知らぬ當時の人々には、或一味の西洋人が吹立てた通り愈々世界の美術は日本美術が乗取つて仕舞ふであらうと見たのも、今となつては馬鹿々々しい事ながら、無理も無い次第である。

△西洋人が斯くて異式の美術に逆上したといふ事が、今度此度日本

美術に熱中したのが初めて、歴史上曾て以前に斯様な刺戟を受けた事が無いと云ふ話であると世界的美術の規準なぞ云ふ法螺が大分面白くなつて来るが、併しコレしきの騒ぎは西洋人に取つては屁でもない十年に一度や二度は必らずやつて居る。

△西洋人と云ふ人種の性質には面白い所がある。これで想ひ出すが、近頃の出版の中にゼローム、ケー、ゼロームの書いた、オブザーヴェーション、オフ、ヘンリーと云ふ短篇がある。此中に女房の尻の重みに耐へ兼ねてトウ／＼離婚と云ふ不吉な結末で漸々頭を上げた男が未だ半年もたぬ内に又々元の女房と一緒にになると云ふ話があるが、友人が折角離縁した女と復た夫婦になるとは怪しかぬと詰ると、

其男の返事が面白い。「別れては見たものゝ、あの通り日々の喧嘩の忙しい後で獨身となつてはイヤ淋くて／＼耐らない。矢張喧嘩でもして居らねば到底單調でやり切れぬ」。

△これは一時の話であるが併し西洋人には一體に斯う云ふ心持がある、單調と云ふ事が大嫌ひで成るべく騒動を續けたい。圖抜けた、素晴らしい騒ぎを時々やつて見たいと云ふ心持が常にある。所で此の心願が事實となつて時々政治、宗教、學術界に破裂すると同様藝術界でも時々破裂する。

△昔の事は措いて云はず、極近世の西洋藝術界の騒動で一寸心に浮ぶのを擧げて見ると、第一が佛國革命前後の佛蘭西クラシシズムの

運動。之に續いて起つたのが「帝國式」の裝飾、なんでもかんでも裝飾はスーツとした細長い線になつて仕舞つた。これに飽きて今一騒ぎと思つて居る内にクラシシズムに反對のロマンチック一派が正反對の議論を押立て喧嘩を始めた。ヤー喧嘩をしたも／＼エライ奴をやつた。之に比べては東京美術學校の悶着などは電氣燈と線香の光見た様のもの。それからロマンチック一派の騒動の間に佛の三十年派と云ふ奴が出て来る。さうこうして居る間にアムプレツシヨニストと云ふ連中が突飛なものを擔ぎ出して又々騒動を始める。サムボリストと名の附いて居る連中がフリーラ／＼とした人魂見た様なものを有難がつて拜み出す。サロンが破裂する日本繪が流行る。硝子

繪から出た看板畫が出る、エキス、リブリが流行する、石版畫の議論が沸く。美術寫眞、色銅版、モノタイプ。アリグラフィキー。ヤー騒いだもくドシく騒いだ。其の揚句が目下流行のアール、ヌヴオー。

△併しそれはラテン人種の佛蘭西だから騒ぎをやるので萬事沈着の、アングロ、サクソン人種は左様な輕調な眞似をしやすまいとの説があるかも知れぬが爰でも相應な騒動をやつて居る。氣狂ひ沙汰で第一に氣が付くのがサー、ウキリヤム、チエムバーの焚付けた支那氣狂ひ。此先生若年の時支那へ行つて歸てからと云ふものは萬事萬端支那風で通さなければ承知しない、ソーマセットの王宮を支那風に

裝飾する、キューの庭園は支那風に設計する、東洋庭園術など云ふ書物を書いて驚かせた。これが今から百五十年と云ふ昔の事で一時は支那風の裝飾法が大流行となつて英吉利の美術は愈々支那風に閉口して仕舞ふかと疑はれた程であつたが今日では爪の垢程も其の形跡が残つて居らぬ。其後が有名なチツペンデール。之も中々騒がしたが今は昔となつて近頃は唯だ古美術品として古道具屋、好事家の愛翫に名を留むる斗りである。十九世紀に這入つてからは建築家のピエーデンがゴシック風の裝飾法を崇拜して中々流行した。ゴシック風の家、ゴシック風の家具、裝飾、一時美術界は五六百年後戻りをしたかと思はれる程であつたが、これも暫時で消滅した。其次に

出て来たのがウキリヤム、モーリス一派の裝飾式、モーリス、マーシャル、フオルクナー商會の全盛時代。其次がアーツ、クラフツの展覽會。ベンソン、ランプ。ホワイト、フライヤー硝子、ケルムスコット版の書物がワイ／＼と褒められたと云ふ時代が僅かに四五年前の事である。

△これは英佛二國のみの話であるが、此二國の運動が時々刻々歐米各國の藝術家に影響を與へるのは電氣仕掛の人形同様、白耳義、和蘭土、埃太利亞、伊太利亞一々時の流行嗜好を傳へる有様は婦人の巴里流行を追ふと少しも違はず。藝界の有様は取引所の騒動と少しも異なる。

△近頃の美術書に散見するイズムを勘定して見ると中々の數である。クラシズム。ミデイヴァリズム。モダアニズム。ロマンチズム。アムプレツシヨニズム。サンボリズム。ポワンチリズム。プラン子リズム。ロシクルシアニズム。プレラフェリチズム。ラスキニズム。トルストイズム。一寸心に浮ぶだけでも是れ程ある。尙此外に臨時に出来るイズムを合したならば五月蠅ほどの數になるであらう。此多數のイズムが僅に過ぐる百年計り殊に其多くは普佛戦争後の三十年程の間に夫れ／＼旗を押立て、西洋人の根氣と辯説でドシ／＼喧嘩をやつたのだから耐らない。之を思ふと奈良朝とか藤原時代とか運慶とか雪舟とか云つてコチて居るシミツタレの喧嘩は

ムク犬の嚙合見た様のもの、裸體問題などはトツクの昔の流行で今は誰も振向く者もない。

△西洋美術界の有様を斯く窺つて見ると歐洲美術界に於ける日本美術の賞讃と勢力なども大體は其呼吸が知られて情けないものである。近頃になつては一時の逆上のほせも下つたと見えて、大分振捨文句が諸方に見ゆる様である。東西の異式は到底混同する事の出来ぬものであるとか、此の兩様は結合して孰れをも利益する所が無いとか、甚しきは日本美術など云ふものは到底歐洲美術と比較すべき價值なきもの。東西美術の和合的製作は未來に於て兎に角歴史的興味を有つて居るなど、日本最負と平素云はれて居る美術雜誌までが憐れな

音を吐く時代となつて來た以後百年は扱置き此の二十年後が怪くなりだした。

△技術の方面からにもせよ、又た批評、歴史孰れの側からにても眞面目に西洋の美術を研究する者は西洋美術界に時々波瀾を起す、此の浮氣の性質に充分注意して、幹と枝との區別、永久のものと、際物の區別をして夫れ々相當の思慮と尊敬を拂はねばならぬ。此區別は過去の歴史に就て見、各時代に現はれた大家の大系統を考へて見ると善く解る。繪畫で云へば、デオト。レオナード。コレツデオ。カラヴァデオ。ヴェラスケス。フランス。ハルス。クールベ。モネ。彫刻で云へば。ピサノ一派からロダンに至るまで。又た建築で

はパンリカ式の建築から現代の鐵骨建築に至る迄、約一千年を通じて進んで來た大方針がある。此の大方針は歐洲人の人種的情勢に従つて、人種の續かん限りは變更せずに進むものと信せられる。

△近頃流行を極めて居るアール、ヌヴォーと名の付いた曲線模様、又た曲線裝飾を土臺として描かれ造られて居る繪畫彫刻の新式なども矢張單調嫌ひの西洋人の考へから出た一時的流行物であらうと思ふ。無論此の新流行の中にも感服すべき所もあり又た現在此の新運動が間接に與つて居る影響中には甚だ健全な所もある。例へば室内裝飾に就て見ても、從來の濃厚、複雑な裝飾法を棄て、淡泊、簡潔のものを撰ぶと云ふ様な事は歐洲美術にとつては何れ程の幸福な

事か知れないが、併し此の傾向は必ずしもアール、ヌヴォーの影響の爲めのみでなくて、歐洲近代美術一般の潮流である、アール、ヌヴォーは殊更に深く其の渦中に投じたと云ふまで、新美術派の主張する本旨たる曲線一點張の裝飾式は決して永久のものでないと思はれる。

△ある人々は此のアール、ヌヴォー模様を以て矢張日本風模様の感化から出來たものとして居る様である。勿論今日となつては種々の混和が基となつて居るから精神的に多少日本裝飾の影響もあるかも知れぬが、直接に日本模様から出たものではない。一體日本が模様上西洋美術家を驚かし又た彼等の製作に感化を與へたのは西洋人

の目から見れば、大膽にも自然を其儘裝飾に用ゐたと云ふ點にあるので、裝飾模様は必らず自然をコンヴェンションライズしたものが或は純然たる幾何的模様のみに限られて居ると思ふて居つた西洋人は自然其儘を毫も變形せず用ゐて居る日本のやり方を見て非常に驚嘆した。斯う云ふと如何にも日本人が西洋人の未だやらぬ所を見事にやつて除けた様に見えて甚だ立派らしいが實は此方で一生懸命畫を描いた積りのものが彼方では模様位に見えたと云ふ話で、丁度南洋の土蠻が眞面目に描いた酋長の肖像を我々が更紗の模様にして面白がつて居るのと同様である。此方では畫を描いたものと思ひ向うでは飾の積りで譽め立つる、相方行違ひながらに褒めたり喜んだ

りして居つたと云ふのが過去二十年許りの大狂言。

△所が純粹なアール、ヌヴォー崇拜家の主張する所は自然の形に全く依らずして曲線のみでやり通すと云ふのであるから日本主義即ち西洋人の眼から見た日本風とは丁度兩極の反對である。此のアールヌヴォー曲線主義を實際にやり通した好例は佛蘭西の建築家ギマールが設計したシャトオー、ベランジエー、此家の内外裝飾に用ゐた模様を見れば新美術式の最も純粹な所が判る。

△然らばアール、ヌヴォーは何處から出て來たかと問はれると、明かな返答には閉口する。種々の書物雜誌などを調べても明白に其の出所を言つて居る場合には未だ逢はない。ある人は此の様式は純然

たる佛國創作でナンシー一派の考案家から出て居ると云ふ。さうかと思へば一體此の新裝飾法はどの邊まで佛蘭西が創作に與つて力あるか分らぬと云つて暗に素と佛蘭西の創作物でないと言ふ事をホノメカして居る人もある。又た中には白耳義が本元であると説く者もある。斯う云ふ有様で何處とも明言されて居らぬが、凡ての記録的考證を去つて其の模様の性質から云ふと、全然ラテン人種の考へ出すべき模様でなく、アングロ、サクソン人種の好尚に適した様式である。此點から推して行くに新模様の本源は矢張英國で、英吉利が本元となつて夫れに種々の變化が加つて出来上つたものと思はれる。兎に角此の模様の性質がゴシックであつてラテン好でないと言

ふ丈は確かである。

△佛蘭西人が中世時代の美事なゴシック建築を有ちながら、又斯くも能くゴシックの精神を現はす丈の情性を有ちながら一體に其の好尚がクラシックであると云ふ事は妙な事である。ヅキオレ、ル、デユックなどは此の人種論に就て八釜敷議論をして居るが、論より證據、ラテン好は飽迄もラテンで未だに變らない。一昨年の巴里博覽會を見た人の中には此感を抱いた人があつたであらう、アレキサンドル橋に立つて左右建築式の相異を見た人は誰も此感に打たれたであらう、博覽會の一時的建物見世物小屋は勝手氣儘、突飛極まつた事をやつて居るが、イザ眞面目の建築となれば對岸の美術館の通り純然と

までは往かぬかも知れぬが大體のモチーヴは矢張クラシックでやつて居る。之を近頃の英米獨白の建築と比べたならば南歐嗜好の勢力は未だ中々佛蘭西に強いと云ふ事が出来るであらう。

△所で先づアール、ヌヴオーの性質はゴシックとして之を近代の美術工藝運動の歴史と比べて見ると、大體の所英國が源であると云ふ勘定がたつ様である。十九世紀の初めから云ふと、一千八百三十年頃より以後に於けるピュージン親子のゴシック美術復活運動モリス、マーシャル、フォルクナー商會の創立が一千八百六十年センチュリー、ギルドの創められたのが一千八百七十八年、アーツ、クラフツ會が第一回の展覽會を開いたのが一千八百八十八年、白耳義

でリール、エッセチックが自由開放主義を採つて創められたのが一千八百九十三年、巴里にビングのアール、ヌヴオーの店の開かれたのが一千八百九十五年の頃、佛蘭西のフェリックス、オーベール。アレキサンドル、シャルパンチエーの連中が初めてコーマルタン街に展覽會を開いたのが一千八百九十七年の二月、獨逸のセツセツシオンの中が起つたのも此頃と思ふ、最後が千九百年の巴里大博覽會である。此間の種々の運動を見て其の系統を溯ると其の本元は英吉利で十九世紀の初めに現はれたゴシック美術復興の萌芽が百年を経て遂に實を結んだのであるとも云へるであらう。

△さて此アール、ヌヴオーに就ては西洋にも種々と議論をする者が

あつて一向に一定しない。今爰に相方の議論を掲て最後に記者の考を出そう。先づ反對論者の議論から始ると、ある有名の建築裝飾家は裝飾の様式と云ふものは決して突然創起し得べきものでないと云ふ處から斯云ふ風に論じてアールヌヴォーを非難して居る、「美術の極幼稚の時代から數千年後の今日に至る美術の進路を観ると未だ曾て新美術が俄かに發現したと云ふ例はない。美術の進歩は除々たる進化であつて時に一種異様の新美術が現はれて此美術は俄然發現した如く見へる事があつても、之は唯だ皮相に於て斯く突飛に發生した如く見ゆるのであつて能く其の裏面に立入て其の系統を探ねると避くべからざる進路を経て其處に至つた者であると云ふことが必らず

解る。

考古學は此眞理を能く吾々に示教して居る。斯の如き譯であつて時に偉大の人物が出て嶄新の様式を出すが併し其偉人等の業は既に先人の遺した智識に調子と興味を添ふる丈の個人的分子を加味したと云迄であつて古來襲蹈して來た様式的一切を放棄して全く新規に創めたと云ふ人は一人も無い。處が現今の美術家で新規新規を追ふて寧日なき輩は實に斯の如き出來得べからざる事を夢想し企圖して居るのである。彼等の放擲する處と彼等の得んと企る處は實に法外である。若し彼等にして今少し思慮深く博識に今少し守る處多からんには藝術界に與ふる處の利益も多いであらうに實に惜むべき事であ

る。加之彼等にはユーモールの感が甚だ尠い此ユーモールの缺乏と云ふ事は人物を添て居らぬ裝飾圖案には左様に目立つても見へぬが人物を添た模様になると實に不愉快である、其馬鹿らしき加減！疲セツポチの、病人面の其氣味悪さ！馬鹿らしい程氣取つた様子！彼等の模様も亦た馬鹿氣て居る。今我輩の机上に不思議な室内裝飾を掲げた雑誌がある。これも多分アール、ヌヴォー最近の考案と云ふのであらふ。壁を見ると腰張から天井迄ベタ一面に線で張詰である。今一つの圖案も線で線で引詰である其有様は大嵐後の電線から思付た考案に違いない。尙他の圖案を見ると半日本風模様を勝手氣儘に置き舞はして裝飾法の規準を片ツ端から打毀して居る。諺に有功の

革命には必らず争闘が先立つと云ふ事であるが、これから判断すると此滅茶苦茶のアール、ヌヴォーは近き未來に來るべき裝飾黄金時代の前徴かも知れぬ。」

△詰り此先生の議論は從來の様式を全く棄て新規の裝飾式に據る事を非難した純粹の保守論であるが他のアール、ヌヴォー排斥者の議論も畧ぼ同様である。處が新進改革者の一派は斯の如き攻撃に對しても少しもヘコム様子が無いのみならず中々に鋭い元氣な返答をして從來の様式の規矩を脱却し得ぬ耄碌連中を熾に罵倒して居る。其一例を擧ると一寸斯云ふ議論である。「詰り新様式を非難する一派の論點は先例に従へ大家の作に倣へと云ふのであるが其の云ふ處は

自身の働を犠牲に供して一見如何にも謙遜の様子が見へて甚だ體裁は良いが併し若し其倣へと云ひ従へと云ふ過去の大家が矢張反對派一派の唱ふる如き心持でやつたなら如何であつたらう。若しゾラの云ふ「美術と云ふものは個人性を通じて見た自然である」と云ふ事が事實であるならば我々技術家は他人の考を棄て自分自身に依頼するより外に道はない。世の中には己と一分一釐も違はぬ人と云ふ者は他に一人とない。佛蘭西の警察で重罪人を検査すると同様な人體検査に據ると寸分も異て居らぬ人と云ふものは決して二人とないと云ふ事である。して見ると比較的單簡な身體でさへ此通であればまして複雑した人の心に至ては個々別々で到底世間二人と同心同氣少

しも違はぬと云ふ者はあらう筈はない。處が藝術と云ふか美と云ふか辭は何と付ようが御勝手次第、兎に角此明かに説明の出來ぬものは一人は扱措き百人かゝつた處で到底現はしきれぬ程複雑した者である。音樂家は僅かに十二曲を基として無限の新曲を編出して居るではないか、畫家が色彩の新調、裝飾模様の新體、材料の新結合を案じ出す位の事は少しも不思議の事ではない。過去五十年の歴史を見ても今日迄大家として仰敬されて居る作者は如何なる人物であるか、師匠尊拜、摸擬一偏の耄碌畫家で一人でも今日に名を残して居る者はないではないか。ロゼチ。バーンデヨーンズ。ウキスラー誰を見ても大家らしき人間に一人として大して先祖の御蔭を有難がつた人

間は居らぬ。世間では新機軸新機軸と云つて頻りに尊拜して居るが併し其實際は新機軸尊拜はホンの見せ振であつて實は新奇を好むのである。それが證據にはどんな馬鹿氣たものでも少しく好尚のある人が再興すると直にワイ／＼と賞立る。處が眞正の改革者で事業の初から賞讃さるゝと云ふものは世間實に稀である。」

△此先生の議論は快活で實に胸のすく様な心地がするが常に進歩と云ふ事を眼前に控へて居る技藝家はこれしきの奮發は持て居らねばならぬ。扱以上の二先生の議論は孰れも南北相反對の喧嘩であるが尙爰に此兩極の間に立つて冷談な批評をして居る一派の説を舉よふ「一體此新式の功能に就ては終局の判定を下すと云ふ事は甚だ困難

である。近代美術の批評と云ふ困難至極の業に失敗した事の經驗を有て居る者で予の判断こそ寸毫の誤りなきものと信じて絶對的に判定を、斯くも新奇の様式に對して與へ得るものは誰もなからう。此新式こそ未來に現れ出すべき様式の原素で尙將來益々發達して完成すべきものかも知れぬ、又た或は直に打捨られて顧る者なきに至るものかも知れぬ議論は相方孰れ共に立てられる。若しこれが一種の新式であるとするれば此新式と從來我々の慣れたる様式との差違はレナサンスと其後に現はれたルイ十四世式又たルイ十五世式と其後に現はれた帝國式の差違に決して過ない。」

△以上は新式に對する歐洲人の考であるが我々外國人の眼から過去

西洋美術の歴史と西洋人の性質とに對照して判斷すると今少し冷酷に云ひ度のである。即ち所謂新式と云ふものは西洋美術の末葉の一時變態を來したものであつて、其動機は専ら西洋人固有の單調嫌ひと新奇を好むと云ふ性質から來たものである其結果は分子として永く未來の歐洲美術に影響を與へるであらうが現在の形體を具へたるアール、ヌヴォーは到底永く歐洲人の好尚を支配するものでなく矢張一時の流行物として早晚消滅し建築字彙、裝飾美術史にアール、ヌヴォーの頭字の下に第十九世紀々末より第二十世紀の初に於て一時流行を極めた一種の模様として説明さるゝに止まるものと信ずる。

批評家と技術家

“Nor can famous artists, any more than famous writers and men of science, be henceforth the faultless gods they were. All their claims are to be sifted in a new and strange way, not by passionate partisans, but by calm, clear heads that care for no man's name. Out of this ordeal many a white fame will come shrivelled and frail and black, like paper out of fire; but others will only be brightened by it afresh. And the benefit to the people will be, that they will no longer worship blindly, like savages, but admire intelligently like thinking men.”

Hamerton.

批評家と技術家

先頃博覽會鑑査官一件に就ては都下の新聞一時に騒ぎ立て例の新聞屋先生得意の皮肉談、怪しき内幕話、さては奇怪なる美術論など續續出で切抜通信は日に机上に山をなし近頃になき騒動を起したが、さて其數多き美術論中これはとて見るべき専門家の説と云ふものなく又平素美術の専門家と云ふにあらざれど萬事何事となく公論に就て論議飽き足らぬ學識ある論客が肅として少しも説を出さぬは、これは平素此等の報道を擔當する記者と、また些細の事にも美術界の事には何事にも後れなく怒鳴り立る連中が悉く惣揚となり終に市

場に斯道の専門家の皆無を告げたと云ふ所に原因して居るであらうが、併し専門家先生外に一向眼立ちたる説の出ぬ所を以て觀ると、我國一般社會殊に高等の教育ありまた學識ある社會が美術に關する智識の程度と熱心の程度も大抵推測らるゝと云ふものである。

此社會一般の無識と、藝術に對する冷淡といふ奴はつまり日本現在の美術なるものは其道の商賣人と其商賣人と利益を共にして居る一部の人の外はさう成行ふと少しも頓着せぬ、美術の事などは所謂對岸の火事視する連中の中にあるといふことを證明するに外ならぬであつて、今回の如き騒動の時に當つて被攻撃者の位地に衝つて居る者には好都合のことであるが、つまり現今の我國は決して活氣あり。

生命あり國民の志望、靈精と親密の關係ある美術を有するものでない事を表白して居るものであれば、夫の有名なフロレンス府でチマブエの聖母子の畫像を町々に引廻したと云ふ話も思出されて實に不吉の徵候として悲まねばならぬ次第である。此様では成程年々幾度か開かるゝ美術展覽會の出品が何時も碌々賣れた例がなく、只々技師家は自が瘦我慢から漸く畫家、彫刻家の體面を保ち、果は苦しまざれに柄にもなき政事家まがいの手技を出しヤタラ無性に其の社會を搔廻すのを殆んど専門仕事の様にして居る有様に立到るは實に無理ならぬことと謂はねばならぬ。

今度の鑑査官問題に就て云つた所で、一體美術の批評家と云ふ者は

如何なる資格を備へて居らなければならぬ者か。鑑別批評と云ふことは、ある新聞屋先生の云ふ通り普通の人間として五官を備へ例の常識を備へて居る者なれば差支ないか。また所謂美學の蘊奥を極め希臘時代の美論でも近世獨乙の美學でも何んでもかでも誰が聞ても見ても堅苦しくて到底明らぬ美學なれば御注文次第何時でも講釋するとの出来る審美學者なれば安心して鑑別批評を任し得べきか。將又美術の學理上の事には全く暗きのみならず性來物の哲理と云ふことを凡て蛇蝎の如く厭惡ひ雷々實技々々と稱へて學理は其實技の經驗を綜合して法則となしたるまでのものにて學んで利する所あるも損する所なく少しも實技と行違ふ所なきものなるを知らず、理論と

あらば頭より排斥して己が頭腦に禡少なきを誇り顔に怒鳴り散して少しも愧る所なき技術家連に一任せば確かなるものか。抑もまた批評家なるものは何の必要ありて世の中に存在しなければならぬものか。そんなら其爲すべき仕事。批評家として常に心懸ねばならぬ事項、其他鑑賞家、又批評の事に就て種々の事は美術を技術家として研究する者と、又學理上より研究する者とを問はず、凡て美術を口にする者に取つては重大な、また、興味ある研究問題である。

さて是等の興味ある論題に就て我々後進連は先づ措き歐米美術界に種々の經驗を積むだ、外國の先輩先生方は如何なる議論をして居るか、之を研究するは損の仕事でないと思ふが。その外國論者の説を調

べる以前に歐米美術社會の批評家と作者との關係はどうか云ふものと云ふ所の大體の話が必要であらう。

理論の上から兎や角云はず所謂常識で見た所で批評する奴はどうかとも困難な地位に立つて居るに違ひない。どうしても一部の技術家、又其技術家に對して友誼上又は製作上同情を表して居る一般の人に恨まるゝに違ひない。これは致し方のない話であつて批評家の方でも自己の思ふ通りの理窟を正直に列べるにはどの作者も褒ると云ふ譯には行かず。又製作者の方でも勝手通りの惡口を云はれて而も七無圖かじき術語を正々堂々と並べ立てられて如何にも理論上自己の作品は善くない様に書立てられては此上の災難はない。と云ふのは外

國の畫家、或は彫刻家、凡て美術家と云はるゝ連中は決して我國にて理想とするが如き武士根生の所謂氣節高く清貧に安んじ風流一方に身を任せて一生を送ると云ふ連中のみでなく普通名を知られる美術家は多くは上流社會の交際場裏に入りて随分華美な生活をして居るものであるから、所得も多い丈にまた入費も要る、それこそ馬車も定紋つきの馬車に乗るし、娘にも女房にも随分立派な風もさせるから中々一通りの所得では遣りきれぬ。例へば英國の畫家が大抵どれ程の入費に係るかと云ふことを推察するには英國にて評判のある、一通り名の顯はれた美術家が一年の収入を見て分る、一寸思ひ當た例を舉れば先年歿した英國の文學家で又畫家であつた、ロセチは

大抵一年一千磅から多いときは三千七百磅であつたと云ふ、之を日本の貨幣に換れば一年一萬圓から三萬七千圓位の収入があると云ふものである。それで此畫家が當時の英國で全盛を極めたと云ふ畫家かと云へばさうでもない、先づ名の知られた畫家であること云ふのみである。又從て甚はだしい華美な生活も出來なかつた様である。であるからレートンとか或はミレーとか又少し時代が溯てくるが、有名なレノルズなど云ふ全盛を極めた畫家などは實に莫大な収入があつたらうし、又それに連て非常な入費が掛つたに違ひない、之は無論外國でも最も金廻のよい、又其金廻りのよい國の又善ひ暮をした所謂成功をした美術家の話であつて、外國とても皆誰もこふ甘く往くと

云ふのではない。「畫家は常に貧し」など云ふ言は外國の古き諺になつて居る位であるから、パンと水で漸く肉靈をつなぐと云ふ連中も随分澤山にあることであるが、併し畫家、美術家として相應の地に立つには大抵どの位の金をとらなければならぬと云ふ事が分る。さてこう云ふ有様であるから技術家にとりては世間の不評判と云ふ奴は、ある格別の場合の外は實に恐るべきものであつて昨日迄の収入は評判によつては明日如何に減するか分らない。爰で此評判の専門とも云ふべき批評家と云ふ奴は技藝家にとりては殆ど金庫の鍵を握られた様なものになる。實に歐米では批評家と作者とは空漠たる理論上の關係でなくつて、社會に地位を保つ、即ち生存上非常な密

切の關係がある。そしてこの關係は世間に信用ある鑑賞家ほど技術家にとりて劍呑の度を増すこと勿論である。夫の有名なラスキン先生が全盛を極めて英國の好尚は自由に氏の云ふが儘に左右せられた時などには先生の技術家に就ての一言一句は實に電氣の如く感じた。先生の筆に一本遣られて生活の立たぬ様になつた美術家も随分多いであらう。其後美術界の議論一變して滅多無性にラスキン主義を攻撃して遂に美術の實技界から空論、駄論、行ふべからざる高尚論として此主義を放追して再び頭の上らぬ様にブツ潰して仕舞つたのは、之は學理上の意見の相違よりも生存上の必要から迷惑を感じた繪かき建築家連が手とり足とりして漸く追放つて仕舞つたと云ふ

のが適切であらうと思ふ。これは理窟は兎も角、勢の上から先づ仕方がないと外云ひ様はない。

所で、こう密切の關係を有ち萬一の時には非常に不便を興へることの出来る地位にある批評家なるものと、其被害者とも云ふべき技術家の間は如何あるべきか、是は云ふまでもなく常に双方に面白からぬ感情の蟠つて解けぬ有様であらうと云ふ事は人情の上から容易に察知せらるゝであらう。實に技術家と批評家の間は大抵は穩かならぬ間柄で、技術家は批評家を目して「知りもせぬくせぬに他人の領分に押入て物知り顔に講釋する、横着者食ひはぐれ」と云へば一方では「職人の無識者め今少し學問でもすれば批評の意味も解るだらう」と

返答する様なもので双方の間で面白くない事が多い。又た幸ひにして自己の作を褒暉やして呉れる批評家でも、それは便宜上、利益上から氣を損はぬまでに交際をして居るまで、眞實批評家の説に服し同時に批評家なるものに對して敬重の精神を抱て居るものでなく、大體の上から批評家の説を輕視して心中竊かに其職を賤むで居ると云ふ様な技術家が多いのである。

是は近頃では批評家なる者が從來の批評家と異つて學問の素養もあり殊に其謂ふ所の技術の實技の經驗を有する者がやることとなり又批評なるものが幾分の經驗を経て今日では漸く纏つた一つの學問になつて來たのと、又一方では技術家が技術一方の職人でなくて廣き

教育を受け能く理論家の唱ふる理窟も咀嚼理會することの出来る丈の人になつてきて、批評家は從來の實技上の無識を覺つて、單に主題の興味に就て是非するのみに止まらずして、實技の巧拙、工夫の優劣を判断し得る様に、即ち言を換へて言へば技術家の眼を以て作品を觀察するを主眼とするを勉むる様になり又技術家も従前の狹隘なる區域を離れて廣濶なる考を以て作品を観るととなり双方より眼を開て共に其歸着する所の一なるを覺り漸次に打解けて往きつゝある様である。是は無論自然の事であつて少しも怪むに足らぬ事であるけれど美術の爲めに實に慶賀すべきことである。

斯くの如く今日では技術家と批評家が新らしき考へで双方を見合ふ

様になつて來て實に目出度ことであるが、併しこれは近頃の事で又ある一部の人に限られて居る事であつて、今日でも皆々斯う云ふ風に目出度行つて居ると云ふ譯では決してない。が併し四五十年前とは餘程違つて來た様である。五十年前の歐羅巴の美術技術社會と批評家の間がどうであつたかと云ふと、随分殺風景なもので、何事にも敵、味方と分れてワイ／＼喧嘩をする至極不淡泊な外國風は、勿論美術界にも一般に行はれてドシ／＼喧嘩をやつた。これは何故であるかと云ふと、今日でこそ美術と云ふものに就ての意義見解が甚だ廣濶になつて所謂形式一方に沈む技術家も又意想専門に描く畫家も、自然派も理想派も皆美術家として考へ、少も異端の人間として取

扱はぬが、併し其時の美術と云ふ奴は伊太利亞風か左もなくば、ウキンケルマン一派の主張した希臘崇拜連の美術論か、然もなくば又たロマンチック派の心持一天張の議論で、各々己が考を主張するは善いが、少しも他派の考へに對して寛大の度量がなくて、他派を見ること惡魔の如くで、美術と云ふものは自分の考ふる或る一主義の外は決してない様に考へたのである、斯う云ふ風に技術家を偏狹な考へに導へたのは、無論其時の繪畫界に時々現はれて來た大立者が種々に己れ等の考を誇大に主張した爲めであるが、併し又た其時の審美學者とか、又批評家とか云ふ者が、勝手な説を製造して技術家の尻に付いて雷同した爲めであらふ。

それから歐羅巴で段々と種々な經驗を経て、過る五六十年の間には以前にする事の出来なかつた種々な勉強をした。之が爲に學者も技師もつまり經驗をして、なんでも美術と云ふ奴は希臘派の稱ふる様なもの計りではなし、又自然派とか理想派とか云ふ連中のもの計りでもなし、中々廣いもので、これで美術を包括したと云ふ様な理窟も技術も立てられるものでない、つまりプレ、ラハ、フェリストも美術家であるし、クラシ、ストも美術家であるし、又ロマンチストも美術家である同じ園の中に華を摘む人々で、只だあの人々は黄色の花を集め、此人々は紫色の花を摘むと云ふ相違のあるのみである、と云ふ所に氣が付いて來たのである。であるから今日の世界に五六十年

前に、ある一派の審美學者、批評家連がやつた様な宣教師の説教風に、ある一派の美術論を擔ぎ出して、何でも斯くせねばならぬ、斯う描かねばならぬと怒鳴立るは、實に時勢遅れの連中で、歐羅巴の美術社會の流潮はそれ等の所を通り過て今日は穩かな今少し實着な研究の出来る所に流れて來た。

併し翻て斯く目出度い譯の分つた世の中になつて來たのは何の御蔭であるかと云ふと。これは美術と云ふ社會に學理と云ふものが入り來り、又學理の中に技術が交つて來た爲に外ならぬである。つまり技術家と學者の了解の爲である、若し歐羅巴の美術社會を從來の通り技術家にのみ任せ、學者社會に少しも實技に就て論底を立ること

がなかつたなら到底今日の目出度現象は見なかつたであらう。批評家、又美術論者が實技の上に己れの理屈を立るとになつて來たのは近來是等の事に關する著書と從來の書物とを比べると一讀して分る又技術家が學術に就て従前と異つた考へを有つて來たと云ふ事は技術家自身の云ふ所と又彼等の書いた本で分かる。それで技術家學者の間の關係はこれ程の所まで進んで來たが、歐米で此外に注意せねばならぬ所は、過る半世紀計りの間に一般の人が美術上の智識に富んで來た事である、或人殊に技術家の連中にて常に斯う云ふ様な事を馬鹿にする連中は此の美術的智識の普及など云ふ事を耳にするとなーニの一聲の下に消して仕舞ふかも知れぬが、併し事實は仕

方がない。歐米にて年々出版になる美術に關する書物を見ても、世間がどの邊まで實技の上に注意をするか、又一般の人士が美術に就てどの位の智識があるかと云ふ事は分るであらう。之は極く一部の例證であつて歐米一般とは云へぬが近頃來た美術書中に面白い統計がある。英國サウス、ケンシントン博物館の第四十六回報告に依ると一昨年中に同博物館に入場した來觀人は百三十六萬九千五百八十八人で其前年に比すると一萬三千八百廿九人減じて居る、博物館の方は減じてあるのに、同博物館附屬美術圖書館の來讀者の統計を見ると、一昨々年は二萬二千六十八人であるに、一昨年は二萬二千五百人となつて讀者は千四百三十二人増して來て居る。こう云ふ風に一般の

讀者が美術に就ての智識が擴がつて來るのは、直接に學術の爲め又た間接には技術、技術家の爲に莫大の利益であつて、歐米技術者社會の財政が追々豊かになつて來るのは美術教育の方法日に新まると、又た隨て一般社會に美術に關する確實な智識が出来るからであらう。實に羨しき次第である。

段々話が枝葉に亘つて來たが、本題に歸つて、さて一體批評家と云ふ奴がなせ必要であるかと云ふと、種々理屈はあるであらうが詰り、技術家と一般人士の間の連鎖となりて技術家の考へもて其作品の長所及び劣所を一般の人に教ふると云ふ所に歸するであらう。讀者の中には此事に就て疑を狭み、なせ其役が技術家自身に出來ぬか、技術

家自身出来るものを技術家にあらざる批評家に托するとは間違つては居らぬかとの話もあらうが、之は技藝家と云ふものゝ内幕を知り又た技術家が製作をする其心持を知らねば到底判らぬ事である。一體技術家と云ふ者は己の信ずる道に一徹でなければならぬ、又た實際他派、他流を顧みる暇もなく、從て自家の歩む道の外には少しも目を觸るゝ筈のものではない。人々は日本の技術家が學問がないとか、考が狭いとか何んとか云ふけれども、學問もあり見識もある技術家で技術の優れたる者は西洋でも實に稀であつて、實際技術研究の生涯と云ふものはその様な閑散なものでない、西洋でも佛蘭西のフロマンタンとか、近頃歿した英國皇室美術學院の長をして居つた

レイトンとか云ふ様な技術も相應にあり學問も他の畫人に比較して勝れて居つた人は實に少ない。随分歐羅巴の技術一天張の技術家、云はゞ保守主義の畫家に云はすれば、學問などは却て技術の妨げをするもので、技術の爲めを思ふものは敬して遠ざけなければならぬなぞと云ふであらう。實に理窟のある話で、技術を學ぶに必要な心持を感じた事の経験のない理論一方の美術學者には分らぬだらうが、決して輕視する事の出來ぬ申立である。古人の大家として敬仰されて居るレムブランドとか、ロイスダエルとか、或はラハアエルとか、又ヴェラスケス。ゲインスポロウなどが如何程の學問があつたか何程の見識を具へて居つたかと考へると、技術家の學問論も大

した方のあるものでない。大體を摘まむだ所で第一技術家には實技を研究するの外他事に心を注ぐ暇はない。暇がないから己れの研究して居る外の事には一般に暗くなる。此結果として己れの知る所の事己れの歩む所の道の外は一概に冷淡であつて、自然と一方に偏した人間になる。爰が技術家の長所又短所で、此位の凝固になつてこそ一方の技術を鍛練することが出来るのであるが、其代りには汎く事物を視察して學理的に細微に亘つて研究する力は乏しくなる。此處が技術家の面白い所であつて、技術家の中には議論の統一と云ふものがない、皆々個々の説を抱持して固く守つて譲らない。羅馬に行つた一人の畫家はサン、ピエトロのミケランゼロの壁畫を見て空

前絶後の大作、世界開闢以來の畫傑と賞立る其傍らに又一人の畫生が糞味噌にミケランゼロを悪く云ひ嗤し、彫刻から出た血のない畫、畫傑もなにもあるものかと頭ごなしに排斥すること決して珍らしき事でない。一方で神様の様に尊敬する技術家も一方にては惡魔の如く賤めらるゝと云ふ有様で、畫人の間には各々別々の考へがあつて少しも纏つた所がなくして種々様々の考へが同時に行はれて往く。此自由獨立と云ふ奴は恐らくは技術社會の外には見ることの出來ぬ事であらう。技術家が世間の禮義作法に頓着せず、不思議な帽子を被つたり不思議な舉動をしたり、妙に變屈の所のあるのと又た如何にも我儘な所のあるのは技術の生涯と云ふ奴が全く他の社會と違つ

て獨立單獨の考へが行はれて行くと云ふ所から自然と起つて來る現象であらうと思ふ。

所で世間一般の人に技術の優劣を示教して、技術の妙所を味ふ力を養ふと云ふ事が以上に云ふ様な頭で出來やうか、無論出來ぬと云ふ外はあるまい。技術家、純粹の技藝家は到底種々の流派を研究して其長點弱點を區分し又た之を綜合して一つの法則とすると云ふことは出來ぬ所で此の役を勤むる所謂美術家の批評なるものゝ必要が起つて來る譯である。

巴里の美術學生畢

明治三十六年一月十九日印刷
明治三十六年一月廿三日發行

定價金廿五錢

編輯者 兼
發行所
印刷者
印刷所

東京市本所區外手町六十番地
古作勝之助
東京市日本橋區兜町二番地
金澤求也
東京市日本橋區兜町二番地
東京印刷株式會社
東京市神田區連雀町十八番地
畫報社

賣 捌 所

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社書籍店
同神田區表神保町
東京堂書房
同京橋區銀座四丁目
東海堂
同京橋區鎗屋町
北隆館合資會社
名古屋市玉屋町一丁目
三輪伊六

賣 捌 所

東京市本鄉區元富士町
盛春堂
同京橋區鎗屋町
良明
京都市寺町通り四條北
田中治兵衛
同寺町通り二條下ル
山田直三郎
函館小野寺
小野寺

4/36

美術畫報

行發(日十二月五)回二月每

▲美術畫報は新古を問はず和漢並に泰西の名畫妙刻其
の他優秀なる美術工藝品等を鮮明なるアートタイプ
(寫真圖)となして掲載す故に本誌を毎號購入せらる
れば終に世界の名寶珍什を蒐集し網羅せらるゝに至
るべし實に是れ作家の師友にして鑒賞家机上の珍寶
なり

定 價	
並製洋紙刷一冊	金貳拾五錢
六ヶ月十二冊	前金貳圓八拾錢
一ヶ年二十四冊	前金五圓四拾錢
上製鳥の子紙刷	前金並製の倍額
一冊	金五拾錢
並製一冊に付	金壹錢
郵税(上製一冊に付)	金四錢

發行所 畫報社

東京市神田區連雀町十八番地

九鬼男爵序○山東直砥翁序
犀水坂井義三郎君編

畫聖ラファエル

定價四拾錢
郵稅貳錢

○名畫寫真版六葉及年表二葉入

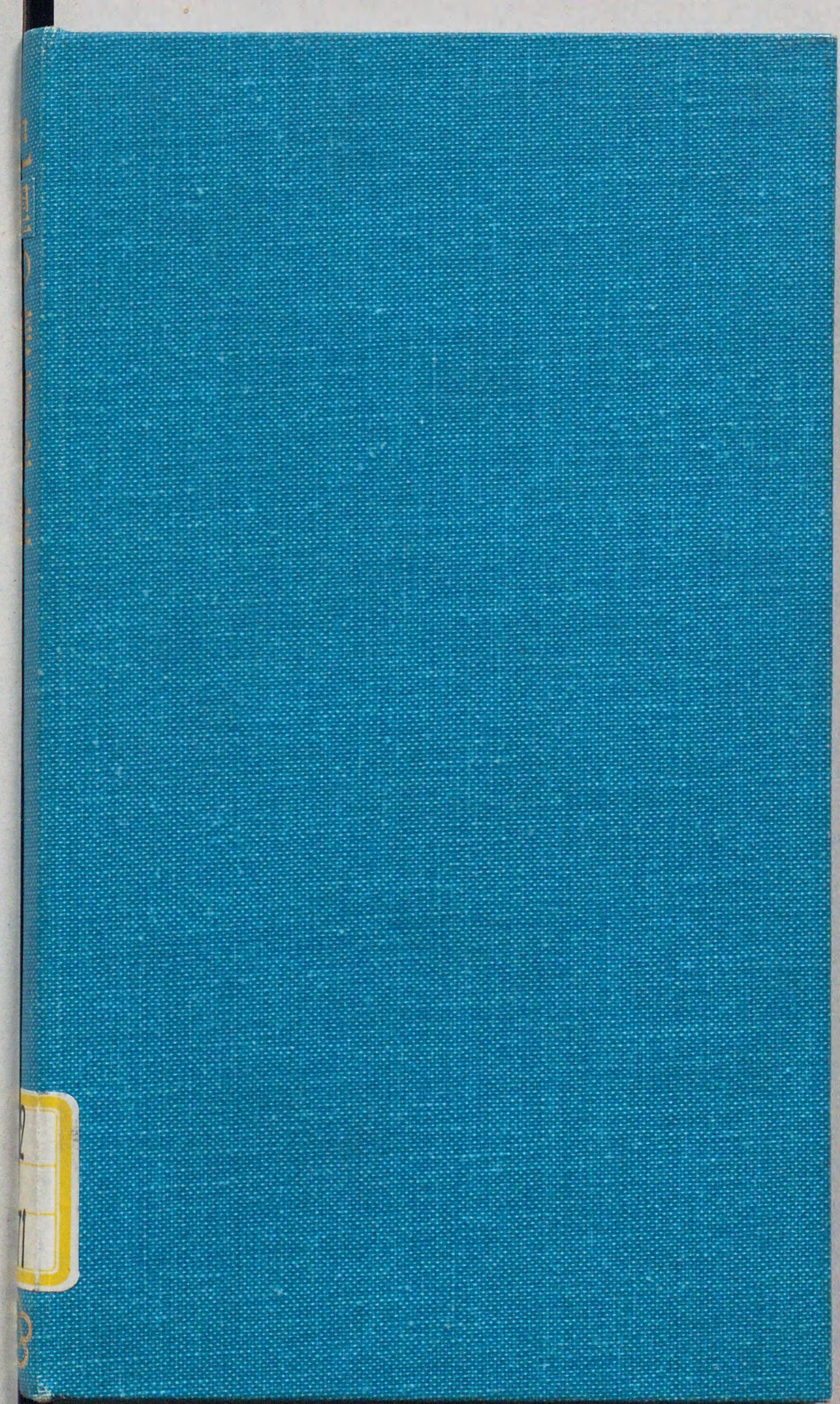
(公評)(中央公論)曰『畫聖ラファエルの傳記及評論にして又一個の小美術史なり、筆を文藝復興期に起しラファエル以前の伊太利の藝術、ラファエルの長技及生涯、性格、畫作等に分ち、明暢の文再讀するに足る、年表及八個のアーティストタイプ及亞鉛版は珍とすべし』(東京朝日)曰『美術家の參考として將た一部の傳記として時勢の要求に應じたる頗る趣味ある好著』云々。(帝國文學)は『本書の印刷、體裁より始めて編者が行文の跡に至る迄毫も輕佻浮薄の風なき』を賞じ。(明星)は『寂寞たる本年の文壇に上田敏氏の詩聖ダンテ、木村氏の文界大魔王』と並んで三種の好傳を得たるを祝したり。(其他諸評答す)

發行所

東京市神田區連雀町十八番地

畫報社



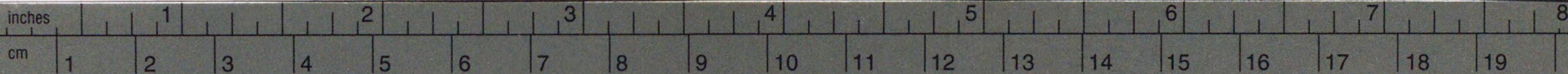


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

